



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宮部金吾「札幌農産出品草木腊葉附属北海道植物名稱一覧」について (1)
Author(s)	加藤, 克
Description	この資料はサイト「札幌博物場研究」 https://www.fsc.hokudai.ac.jp/mk_hunhm/index.html からもダウンロード可能です。
Citation	札幌博物場研究会誌, 2025, 5-33
Issue Date	2025-12-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98596
Type	journal article
File Information	HUNHM_magazine_2025_05_33.pdf



宮部金吾「札幌農産出品草木腊葉附属北海道植物名稱一覧」について (1)

加藤 克*

* 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館, Botanic Garden & Museum, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University, Kita 3, Nishi 8, Chuo-ku, 060-0003, Sapporo, Japan

はじめに

宮部金吾(1860-1951)は、1881(明治14)年に札幌農学校を二期生として卒業したのち、1883年に母校の教官として採用され、1927(昭和2)年に定年退官するまで終生現在の北海道大学において研究、教育に携わった植物学者である。研究対象は、北海道、樺太、千島の陸上維管束植物の分類、分布、生態をはじめ、植物病理から海藻や菌類、民族植物学などでも重要な業績をあげた。また、自身の研究のみならず、工藤祐舜、館脇操、山田玄太郎、高橋義直、三宅勉、伊藤誠哉、平塚直秀、枡内吉彦ら数多くの後継者を育てた教育者であり、日本における近代北海道植物学の先駆者、泰斗である。

宮部が残した植物学上の業績は数多いが、その第一歩となったのが「札幌農産出品草木腊葉附属北海道植物名稱一覧」(以下「一覧」)である。北海道の自生植物の目録である「一覧」は、札幌農学校在学中の1880年8月に、翌年に開催が予定されていた第二回内国勸業博覧会へ出品するようにと校長森源三から指示を受けて制作したもので、腊葉標本とともに博覧会に出品された。博覧会終了時には審査員により褒状が与えられており、弟子の館脇操が宮部の伝記において「将来の北海道植物誌の胚胎とも見るべき」[宮部金吾博士記念出版刊行会 1953、以下宮部 1953]と評価したように、札幌農学校生徒宮部金吾が植物学者として認知されるようになった最初の業績として位置づけられる。

また、「一覧」は宮部が学生時代にまとめたものであることから、そこには札幌農学校の御雇外国人教師デヴィッド・ペンハローによる教育の影響を読み取ることができるだろう。宮部が卒業後に東京大学に内地留学した際に「札幌には本がなかった」[宮部 1953]のために、北海道の樹木を理解するための文献を探索したと述べているように、開校間もない札幌農学校には植物学にかかわる主要文献が揃っていなかった可能性がある。宮部がいかなる文献を利用して、いかなる内容の「一覧」をまとめたのかを把握することは、農学校初期の植物学教育がどのようなものであったのかを理解することにつながる。加えて、明治初期の内国勸業博覧会において優等と評価された出品物がどのようなものであったのかを示す博覧会史の材料として重要な存在となりうるだろう。

しかしながら、宮部自身はこの「一覧」について自叙伝で語るところがなく、「一覧」の三年後にベンサム・フッカーの分類体系に基づいてまとめた『北海道志』物産部の植物目録[開拓使 1884]を「北海道植物誌の嚆矢」として位置づけている[宮部 1953]。これは、館脇が『北海道志』を「印刷になった北海道植物誌の産ぶ聲」と評価するように、「一覧」が博覧会の出品物であり刊行されなかったものであるために、宮部自身は業績と評価しなかったのかもしれない。あるいは制作段階で十分な文献を利用することができなかったために、宮部自身にとって不十分な内容であったという認識があったのかもしれない。しかし、仮にそうであったとしても、宮部は「一覧」を終生所蔵し続けており、何らかの価値を認めていたことは間違いない。同時に、現在のわれわれにとって、上述したような歴史資料としての価値をもたらす存在であることは疑いようのない事実である。

ただし、「一覧」はあくまで博覧会出品物であり、書籍や論文として刊行されたものではない。このため、その存在については館脇[宮部 1953]が言及するほか、「一覧」制作にあたって宮部が参考とした北海道産植物標本目録の制作者ルイス・ペーマーを対象に調査を行った中尾[1993]が言及するのみで、その具体的な内容は知られていない。また、「一覧」として知られている資料は北海道大学附属図書館に所蔵されている私家複製版⁽¹⁾のみである。後述するように、現存する「一覧」には多くの追記や修正、付箋を利用した情報の追加などがあるが、複製では判読しがたい文字の存在や、記載が修正・追記であるのか、当初から記載されていたものであるのかを判読しがたい部分がある。この課題を解決するためには「一覧」原本を調査する必要がある。「一覧」の内容を把握するためにその存在を探索した中尾[1993]は、宮部自身が所蔵していた「一覧」が1989年ごろに遺族から遺品として北大農学部⁽¹⁾に寄贈された資料群の中に含まれていたこと、原本は開拓使用箋に筆書きされたものであり、その複写を入手して考察したことを述べているが、原本の調査は行っておらず、詳しい所蔵機関を示してはいない。

北大農学部⁽¹⁾に寄贈された宮部の遺品とは、1989(平成元)年に当時の農学部附属植物園事務所として利用されていた旧札幌農学校植物学教室の建物が取り壊されることを惜しんだ卒業生らが、当該建築物を宮部金吾の遺品を展示する記念館として保存す

(1) 附属図書館貴重資料室・宮部金吾文庫所蔵、資料番号 0171550533。

ることを目的に宮部の遺族から譲り受けた資料群である。しかし、資料の管理は農学部名誉教授の四方英四郎が行っていたため、植物園関係者は資料の詳細を把握していなかった。その後、2001年に学内附属施設の改組により北方生物圏フィールド科学センターが設置されて旧植物園と農学部博物館とが統合され、博物館部門を担当する筆者が四方から宮部資料の管理業務を引き継いだ。これにより宮部資料が広く活用できる体制が整ったが、現在の所蔵機関は農学部ではなくなっていることに注意が必要である。なお、筆者が宮部資料の管理にあたって以降20年以上の間、「一覧」原本の所在確認や調査が行われたことはない。

以上の背景を踏まえ、本稿では「一覧」がどのような資料であるのかについて、原本に基づいて内容を精査、紹介することとする。その際、単純な翻刻ではなく「一覧」の制作にあたって宮部が利用していたノートや植物標本、制作経緯を把握するための日記の抄録など、残されている関連資料を用いて、宮部の研究環境、札幌農学校の教育環境などを詳細に考察することとしたい。ただし、「一覧」に記載されている植物種は追加を除いても684種⁽²⁾にのぼり、「一覧」とノートの記載の対応関係やソースとなった文献を整理するだけでも多大な紙幅を要することになる。また、宮部が利用した可能性のある植物標本を探索するためには、北大総合博物館陸上植物標本庫(SAPS)の27万点以上の標本[北海道大学総合博物館2020]の調査を必要とする。これらの点を踏まえ、本稿は「一覧」を対象とする報告の第1回として、調査対象資料群の概要紹介、今後の検討の方向性および課題を示すこととする。一部の調査では解明できない課題も多いが、各種の記載調査ほか多面的な調査を継続したうえで全体の課題解決に取り組むこととしたい。

なお、本報告はあくまで「一覧」の資料学的価値を評価するためのものである。宮部が『北海道志』を現在植物学上では用いることのない用語「顕花植物」の一覧と記しているように、時代的背景から現在の分類体系や種分類とは異なる記載が「一覧」および関連資料には多数含まれている。本報告では、現存する「一覧」と関連資料の情報を適切に理解し、広く共有することを主たる目的と位置付け、植物学的記載について現在の認識に基づく妥当性に言及することはしない。多くの研究者が利用できる情報を整理し、北海道の植物分類学史などの再検討に寄与することを期待するものである。

1. 材料と課題

ここでは、本報告が取り扱う資料の概要を整理、紹介するとともに、現時点における課題と関心の所在を示す。

1-1. 「札幌農産出品草木腊葉附属北海道植物名稱一覧」 原本および複製版

北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園・博物館部門(以下HUNHMと標記⁽³⁾)が管理する宮部資料には、北大附属図書館に所蔵されている私家複製版の「一覧」と同じ製本の複製版【mi_112】(以下【 】で括った情報は、HUNHMにおける資料番号を示す)3部と「一覧」の原本【mi_689】が所蔵されている[図1]。HUNHMでは詳細な経緯を引き継いでいないが、附属図書館の複製版の刷年が中尾[1993]の調査時期にあたる1992年であること、体裁が同一であることからみて、(1)中尾の調査に対応すること、(2)附属図書館の宮部金吾文庫に収蔵すること、(3)宮部金吾記念館での展示や原本を保存することを目的に、四方が複製版の製作を附属図書館に依頼したもののだろう。

次に、これまで知られている「一覧」にかかわる情報を整理しておく。

宮部伝記

館脇操は、宮部の自叙伝[宮部1953]補遺第三篇研究業績の一部として「四 顕花植物と宮部先生」の記述を担当している。その中で、「一覧」を宮部の北海道の植物誌研究の最初のものとして触れている。以下、そのまま引用する。

(一) 札幌農産出品草木腊葉附属 北海道植物名稱一覧表(未刊)(一八八一)

明治十四年第二回内国博覧会へ出品したもので、二月記載を終り、六月十日該博覧会から「北海道所産植物の諸植物を類集乾腊し、科目を正して和漢洋の名稱を併識す。其注意の篤き頗る嘉すべし」という褒状を受けている。審査官に小野職愨、伊藤圭介氏等あり、審査部長には田中芳男氏がいた。この一覧表にはCatalogue of plants indigenous to Hokkaidoという英訳がついており、ベンサム、フッカー両氏の式に従って配列し、産地、性質、開花と結実の季節を記し、解説を要するものには逐条これを掲載している。但し書に「出品外の草木は開拓使雇米人ルイス・ビマー氏の明治七年中北海道諸州に於て採蒐せる腊葉の目録及びフレンシユー、サバチャー両氏の著した大日本植物綱目その他三四の書中より採録するものなり」とある。あぐるところ六八四種、九五科である。これは前年八月に森校長より命ぜられたもので、在学四年目にしてこの業績をあげたことは非常に注目値する。

(2) 「一覧」には亜種も含まれており、厳密には分類群と表記すべきであるが、煩雑さを避けるため本稿では種と表記する。

(3) 旧農学部博物館時代から標本所蔵機関名称として利用されてきた「Hokkaido University Natural History Museum」のアクロニウムである。

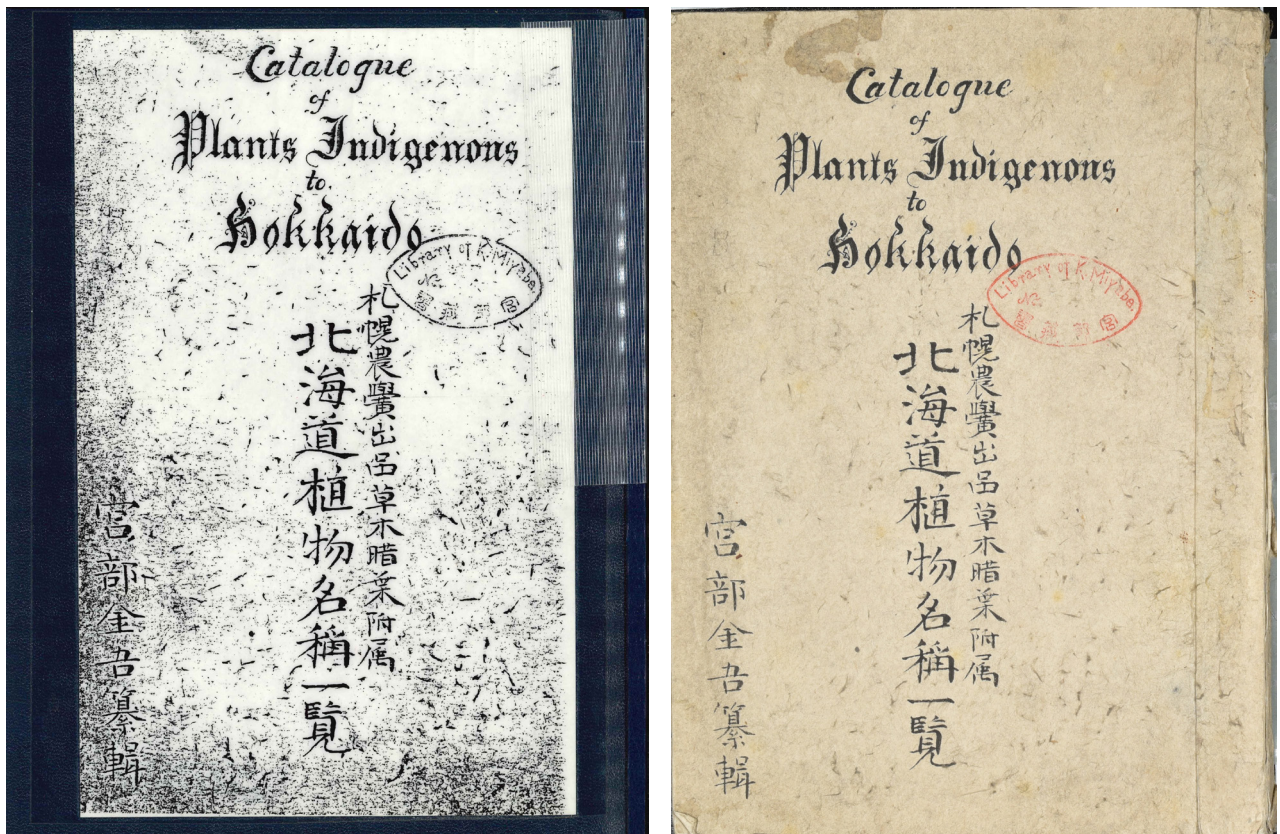


図1.「一覧」複製表紙（左）、原本表紙（右）

中尾真弓による記述

中尾〔1993〕は館脇の記述を引用する形で「一覧」を紹介しているが、宮部が執筆を終了したのは1881年3月24日としている点に違いがある。「一覧」はカバーリング3枚、科目表(95科)12枚、本文(684種)214枚、英文科名目録5枚の構成からなっていることを紹介し、付属する科目表の内容と各科に含まれる種数を報告した。また、本文の24種にバーマーを含む外国人の名前が注記されており、関心を寄せていたバーマーの名前がある20種の植物の情報を整理している。これらの種を宮部が実際に採集できなかった種と評価し、博覧会に出品された標本を660枚と判断している。

「一覧」の同時代資料

館脇〔宮部 1953〕が紹介しているように、「一覧」は第二回内国勸業博覧会に出品されて褒状を受賞していることから、博覧会関連資料にその存在を見出すことができる。

・『開拓使事業報告』第二編〔大蔵省 1885〕、勸農 - 博覧会 - 第二回内国勸業博覧会 - 札幌本庁の項

ここには開拓使の出品物として褒賞を受けたものがまとめられており、その中に、「産地：北海道各所、褒賞：褒状、品名：植物腊葉、薦告：北海道所産ノ諸植物ヲ類集乾腊シ科目ヲ正シ和漢洋ノ名ヲ併識ス、地名又ハ衛名：札幌農学校、出品人又ハ製造人：採集人 宮部金吾」の記載がある〔図2〕。

・開拓使による出品目録（北海道立文書館所蔵簿書 2388「第二回内国勸業博覧会出品目録」、主務者開拓使東京出張所第二回内国勸業博覧会委員）

この目録の博覧会出品区分第五区第十類に、「番号：卅六号、物名：本草、製：程村紙五百枚ニ五百種ヲ添、数：一函、産地：石狩国各所、製造人：札幌農学校、金五拾円、不賣品」とあり、朱書きの頭注として「褒状」が追記されている〔図3〕。

・勸業博覧会事務局による出品目録

「第式回内国勸業博覧会出品目録 第五区」〔明治文献資料刊行会 1975a〕には、札幌本庁の出品物として、「△本草（三六）程村紙五百枚ニ五百種ヲ添、石狩国各所、札幌農学校」と記載があり、開拓使側の情報と合致している。

(4) 簿書には開拓使の出品目録が複数綴じられており、「褒状」の注記があるのは一か所のみである

[illegible]

図2.『開拓使事業報告』にみる「一覧」受賞の記載

第一	第二	第三	第四	第五	第六	第七	第八	第九	第十
品寶	水木寶	岩楓寶	毛子美	胡桃寶	水草				
五	日	日	日	日	日	日	日	日	日
一瓶					一函				
日	日	日	日	日	日	日	日	日	日
金五拾圓	金四拾圓	金三拾圓	金二拾圓	金一拾圓	金五拾圓	金四拾圓	金三拾圓	金二拾圓	金一拾圓

図3. 開拓使出品目録の記載

・勸業博覧会事務局による褒賞授与人名表

「第二回国内勸業博覧会 褒賞授与人名表 下 褒状 官庁ノ部」[明治文献資料刊行会 1975b] には、「植物腊葉 開拓 札幌農学校出品 製造人 宮部金吾」とある。

以上の刊行物もしくは北海道立文書館で公開している目録に基づいてアクセスできる資料からは、宮部が「一覧」を完成させた日時に齟齬があることと札幌農学校の宮部金吾が博覧会に出品した標本点数が500枚500種であり、中尾[1993]の660枚という推測とは異なっていることが確認される。

1-2. 「一覧」 原本と複製版の違い

ここでは、「一覧」原本と複製版の比較に基づく情報を整理する。

「一覧」原本は縦 276 ミリ、横 198 ミリで、袋とじにした開拓使用箋 114 丁と末尾の洋紙 3 枚を和綴じし、包表紙仕上げをしている。表紙には「Catalogue of Plants Indigenous to Hokkaido、札幌農學出品草木腊葉附属北海道植物名稱一覧、宮部金吾纂輯」と記載がある〔図 1〕。構成は開拓使用箋による凡例 1 丁、科目表（和名）一覧 6 丁、本文 107 丁と左から始まる洋紙の科目表（学名）目次 5 ページになる〔図 4-7〕。館脇〔宮部 1953〕は英語名称と凡例を引用していることから、伝記の記述にあたって原本を確認しているものと考えられる。

複製版は縦 273 ミリ、横 210 ミリで、原本各丁の表裏を別々に複写し、プラスチック製の製本キットで綴じている。原本表紙の複写が複製版表紙への貼付けだけでなく中表紙としても利用されているため、中尾 [1993] はカバーリング 3 枚 (= 中表紙、凡例 1 丁の表裏) としている。「一覧」原本には付箋が多く貼られており、宮部が情報の修正や追加を行っていたものとみられるが、複製版でも付箋を別に複写した上で原本と同じ場所に貼り付けられており、忠実に複製を行ったことが確認できる。しかし、複製版には原本と比較した場合にいくつかの課題がある。以下列記してゆく。

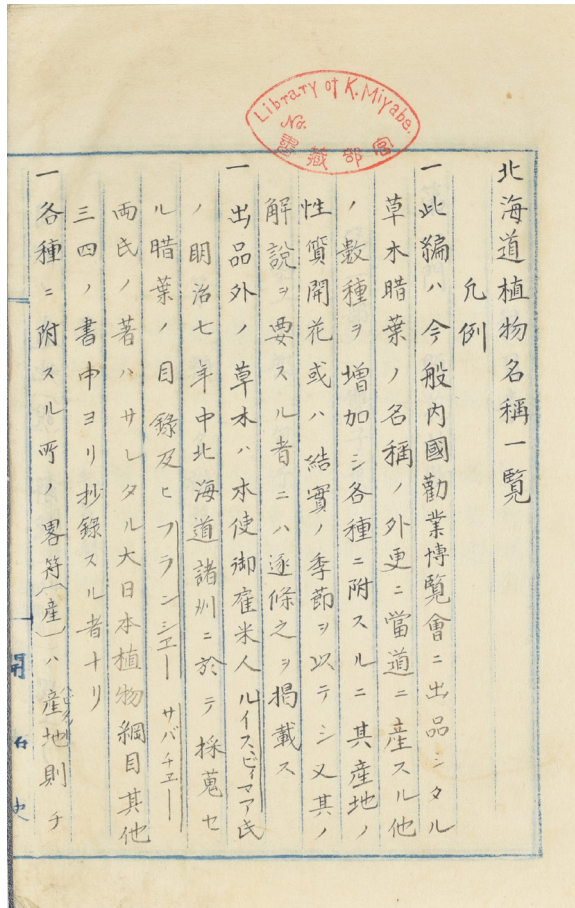


図4.「一覽」凡例(部分)

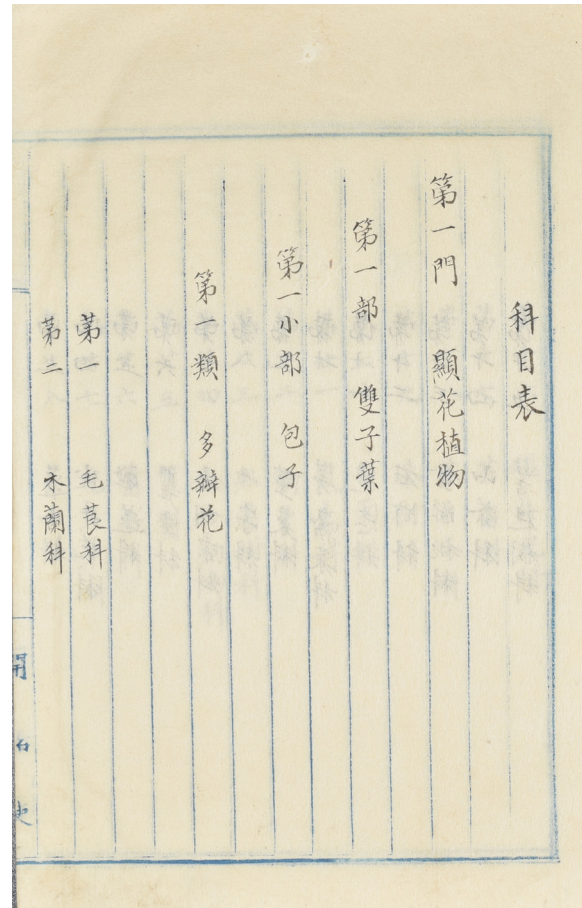


図5.「一覽」科目表(部分)

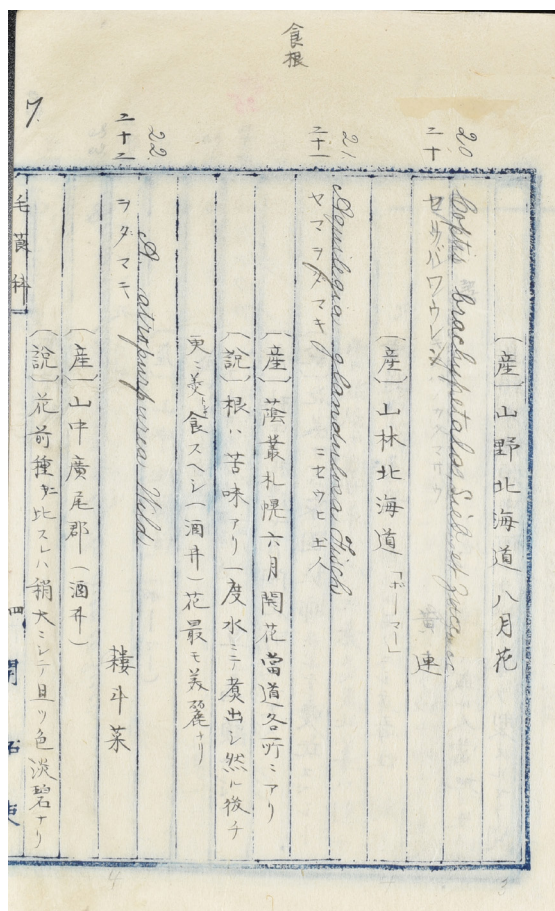


図6.「一覽」本文(部分)

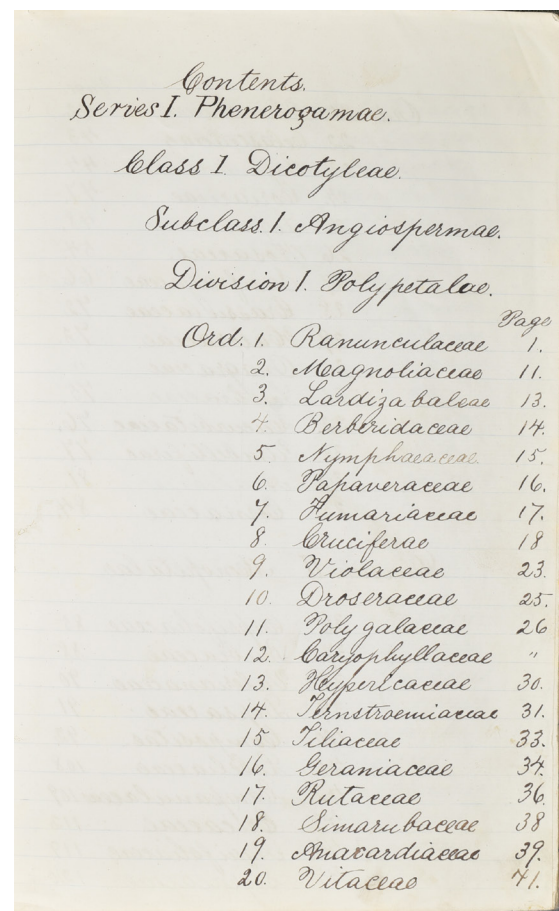


図7.「一覽」学名科目表(部分)

課題1：洋紙部分最終ページの欠落

「一覧」原本の末尾には洋紙の表裏5ページにわたって学名の科目表〔図7〕があり、中尾〔1993〕が述べるように複製版でも5ページ分が複写されている。しかしながら3枚目の裏面（左6ページ）は複写されておらず、複製版には含まれていない。このページには、上部に「171. ニノミ 海藻」という朱書きの文字と、「684 190（他ノ著書等ヨリ） 494（札幌附近）」という鉛筆の記載がある〔図8〕。後者の記載は、「一覧」掲載種684種から、宮部が実際に採集したのではなく先行文献の情報に基づいて分布を執筆した190種を差し引いた494種が札幌付近で調査を行った対象であることを示している。複製版製作にあたっては、この記載の意味が理解できず、不要なページとして扱われたものとみられる。しかし、この記載から宮部が博覧会に出品することができた種が最大でも494種であったことが把握され、同時代資料が出品数「500種500枚」としていることを考慮すると、おそらくはいくつかの種を重複して500枚の標本が出品されたものと評価される。中尾〔1993〕の関心がバーマーにあったために「一覧」本文にある人物名の数で出品標本点数を推測することになったが、このページが複製版に含まれていれば別の見解に至っていただろう。

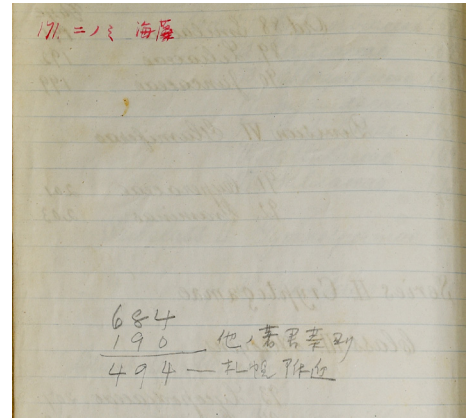


図8.「一覧」原本の洋紙6ページ目の記載

課題2：朱書き記載の区別が困難な点

「一覧」には、各種の記載の上部に種番号が記載されているが、追記する形で様々な番号や「写」、「志」などの記載がある。また、各科の末尾には「一覧」編集後の研究によって追加すべき種が追記されている事例もある。これらの補記・追記は黒インクもしくは赤インクで記載されているが、複製版はモノクロ複写であるために色の違いが区別できず、追記の時期や意図の違いを適切に評価することができない〔図9〕。

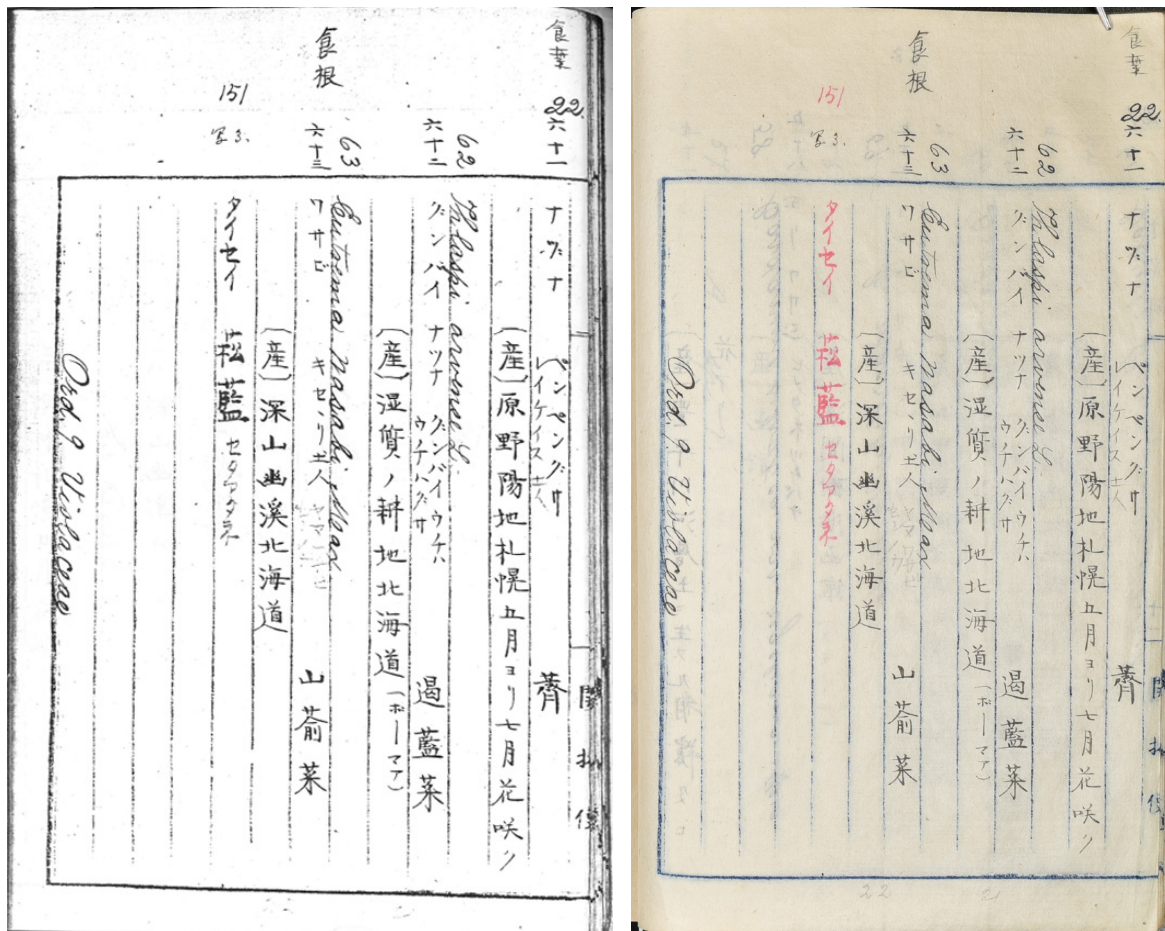


図9.「一覧」追記における色の書き分け認識の違い. 複製版（左）と原本（右）

課題3:「一覧」下部の鉛筆書きによる番号記載が読み取れない点

「一覧」の各種記載の下部には鉛筆で番号の記載があるが、文字が薄いため複製版では読み取ることが困難な部分がある〔図10〕。この数字は連番で最大「190」となっていること、番号のある種の採集地・分布が「函館」や「北海道」である事例が多くなっていることから、課題1の「他ノ著書等ヨリ」引用した190種を算出するために用いられたものとみられる。ただし、複製版では記載の有無を明確に判断できないため、この考察を進めることが難しくなっている。

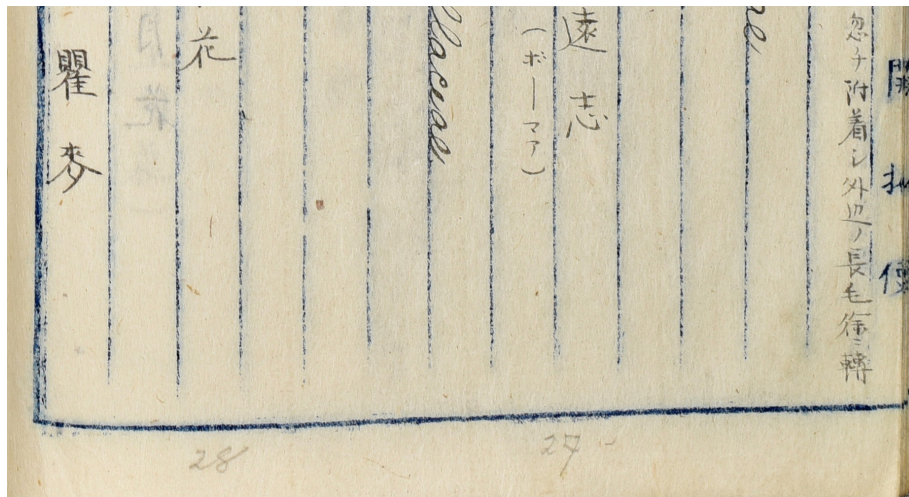
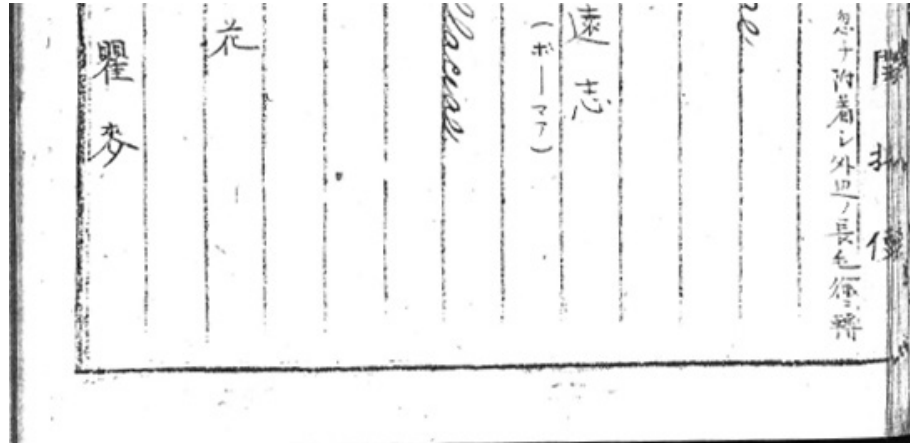


図10.「一覧」下部にある鉛筆記載の認識の差. 上の複製版では判読できない「27」、「28」が原本では読み取れる

課題4: 付箋による記載修正の評価

「一覧」には記載修正のために付箋が多く貼り付けられており、複製版でも忠実に再現されている。しかし、これらは一部にのみ糊が塗られ、付箋の下を確認できる部分にのみ実施されているに過ぎず、記載を完全に抹消するために和紙を貼り付けている部分などについては十分な情報を得ることができない。

種番号51「ヤマガラシ」を例にして紹介する〔図11〕。まず、学名として「*Barbarea vulgaris*, R. Br. var. *stricta*, Reg」が記載されているが、原本をみると属名の「Bar」の「r」から亜種名の「*stricta*」の「st」あたりまで紙が貼られている。これはもともと左の種番号52と同様に「N.」と省略されている属名（*Nasturtium*）と種小名、記載者のみの短い学名が記載されていたが、その記載を紙片で隠したうえで、異なる学名を記載したものである。和名「ヤマガラシ ミヤマガラシ」も「ヤマガラシ」の部分に紙片が貼ってあり、下には「イヌガラシ」と記載されている。このように、原本であれば用箋を透かして見ることで確認できる元の記載が複製版では調査することができない。逆に、「ヤマガラシ」和名下部の漢名「水芥菜」や種番号50の「ミヅタガラシ」の漢名「碎米薺」、産地の「札幌五月開」の記載が複製版では薄くなっているものの読み取ることができるが、原本のこの部分には紙片が貼られており、抹消すべき情報として宮部が扱っていた部分である。このように、複製版では抹消しているのか、薄れているのかを判断することができないという事例も少なからずある。

以上のように、原本は複製版に比べて「一覧」の原形の把握や、宮部による修正・追記・抹消の処理を適切に把握することが

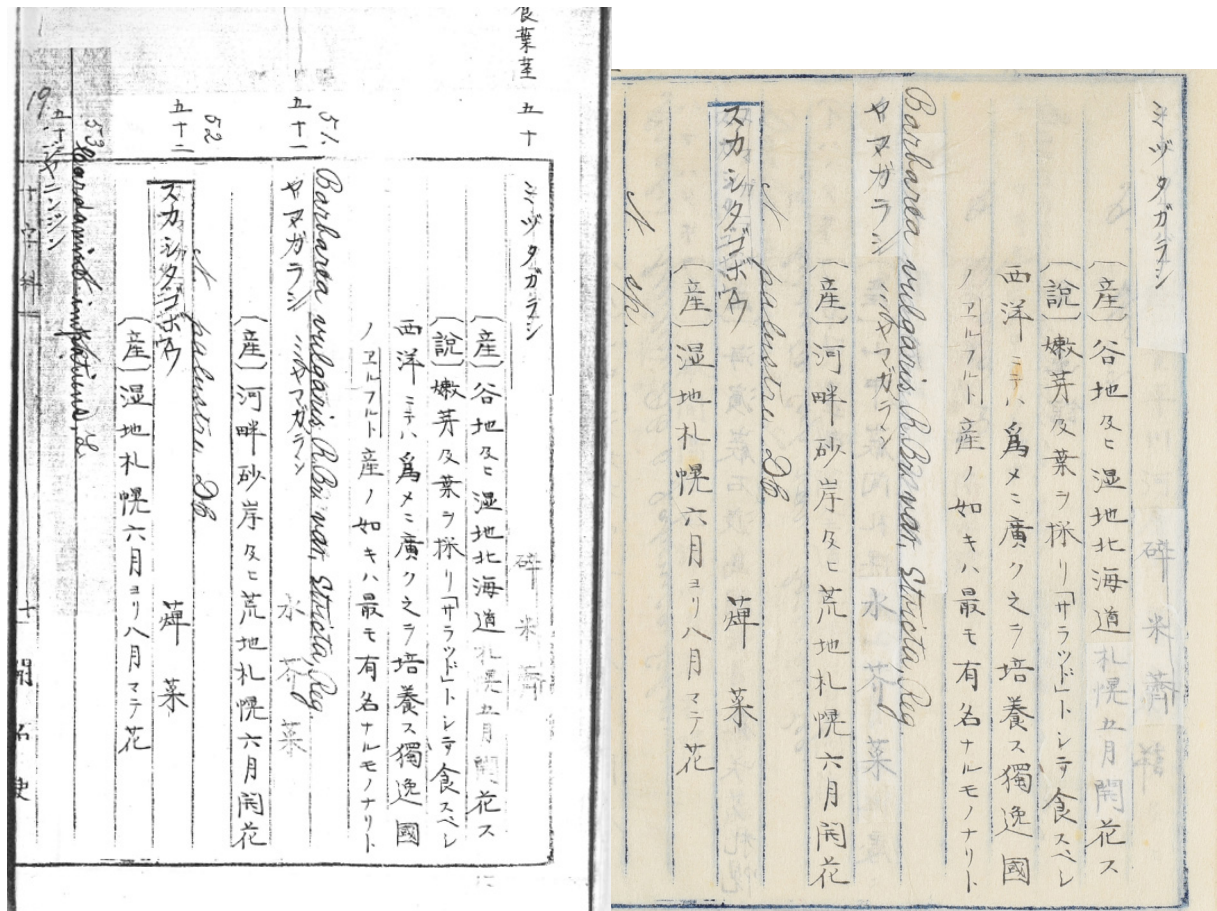


図 11.「一覧」複製版では判読しがたい修正の状況。「ヤマガラシ」の学名や和名の部分に和紙が貼られ、修正されている。
「ミヅタガラシ」の漢名や「札幌五月開」などが和紙で消されているが、複製版では判断できない

できる。現存する「一覧」を資料学的観点から精査することにより、博覧会に出品された「一覧」がどのようなものであり、現時点における「一覧」とどのように異なっているのか、宮部が札幌農学校に所蔵されていたどのような文献や資料に基づいて制作したのかを明らかにすることができる可能性がある。また、宮部による修正や追記がどのような情報に基づいて、いつ行われたのかを明らかにすることで、農学校の研究・教育環境や宮部の植物学的知見、研究資源の蓄積の変遷を解明することが期待できる。

1-2. 「一覧」関連資料

次に、「一覧」の制作過程や背景を理解するうえで重要・有益と考えられる関連資料について紹介する。

1-2-1. 宮部日記抄録

「一覧」原本とともに宮部資料として管理されている「日記抄録（仮称）」【mi_531】がある。これは、宮部の誕生の1860年から1947年までの宮部に関する事項が年次ごとに整理されているものである。「伝記資料」の整理箱の中に保管されていたことからみて、宮部が自叙伝〔宮部 1953〕を執筆するために自身の日記や関連資料から必要な部分を整理したものと考えられる。二次的な資料であるが、宮部自身によって整理された資料であること、個別の記載はそれほど長いものではなく、多くは自叙伝にも引用されているとはいえ、必ずしもすべてが引用されていないことから、宮部の個人史、札幌農学校史、札幌独立教会史などを調査するにあたって情報を豊富なものにする価値を有している。

日記抄録において「一覧」にかかわる記述は、以下の4か所を確認することができる。

1880 明治十三年 [図 12]

Aug : 24 森校長ヨリ明年東京ニ於テ開カルベキ第二内国勸業博覧会へ北海道産植物標本ヲ出品スル旨命ゼラル

Dec : 29 List of Plants indigenous to Hokkaido ヲ書き終ル

1881 明治十四年 [図 13]

III : 24 第二回内国勸業博覧会へ出品スベキ北海道産植物標本ノ目録ヲ記載シ終ル

VI : 10 第二回内国勸業博覧会へ出品シタル植物腊葉ニ對シ褒状ヲ受ク、其文ニ曰ク、北海道所産ノ諸植物ヲ類集乾腊シ

科目ヲ正シテ和漢洋ノ名称ヲ併識ス、其注意ノ篤キ頗ル嘉ス可シ。審査官小野小野職愨、伊藤圭介、林忠良、手嶋精一。

審査部長近藤真琴、田中芳男。審査副部長九鬼隆一。審査総長佐野常民

1880年8月の森校長からの指示および1881年6月の「一覧」が受賞した褒状に関する情報は館脇[宮部 1953]の情報とも合致しており、館脇は自叙伝補遺の編集にあたり「日記抄録」も参照していたものとみられる。一方で、「一覧」の完成日は館脇のいう1881年2月ではなく中尾[1993]が示した3月24日であることが確認できる。中尾自身は原本の調査を実施していないことから、「日記抄録」も確認していないと推測されるが、おそらくは調査に対応した四方が複製版とともに「日記抄録」の情報を提供したものだだろう。館脇が2月とした理由は定かではないが、第二回内国勸業博覧会が3月1日に開場しており、それに間に合わなかったはずはないという理由から修正を加えたのではないだろうか。明治初期の博覧会では遅れて出品されるものや追加出品されたものも少なくなかったので、「一覧」の完成時期は宮部が記載したとおり3月24日とするべきである。

ここで注目すべきは、1880年12月29日に書き終えた「List of Plants indigenous o Hokkaido」である。この表題は「一覧」の「Catalogue of Plants Indigenous to Hokkaido」とは異なるが、8月から着手していた「一覧」の準備、翌年3月の完成の中間地点であることからみて無関係のものであるとは考えられない。これに該当する資料が次に示すものである。

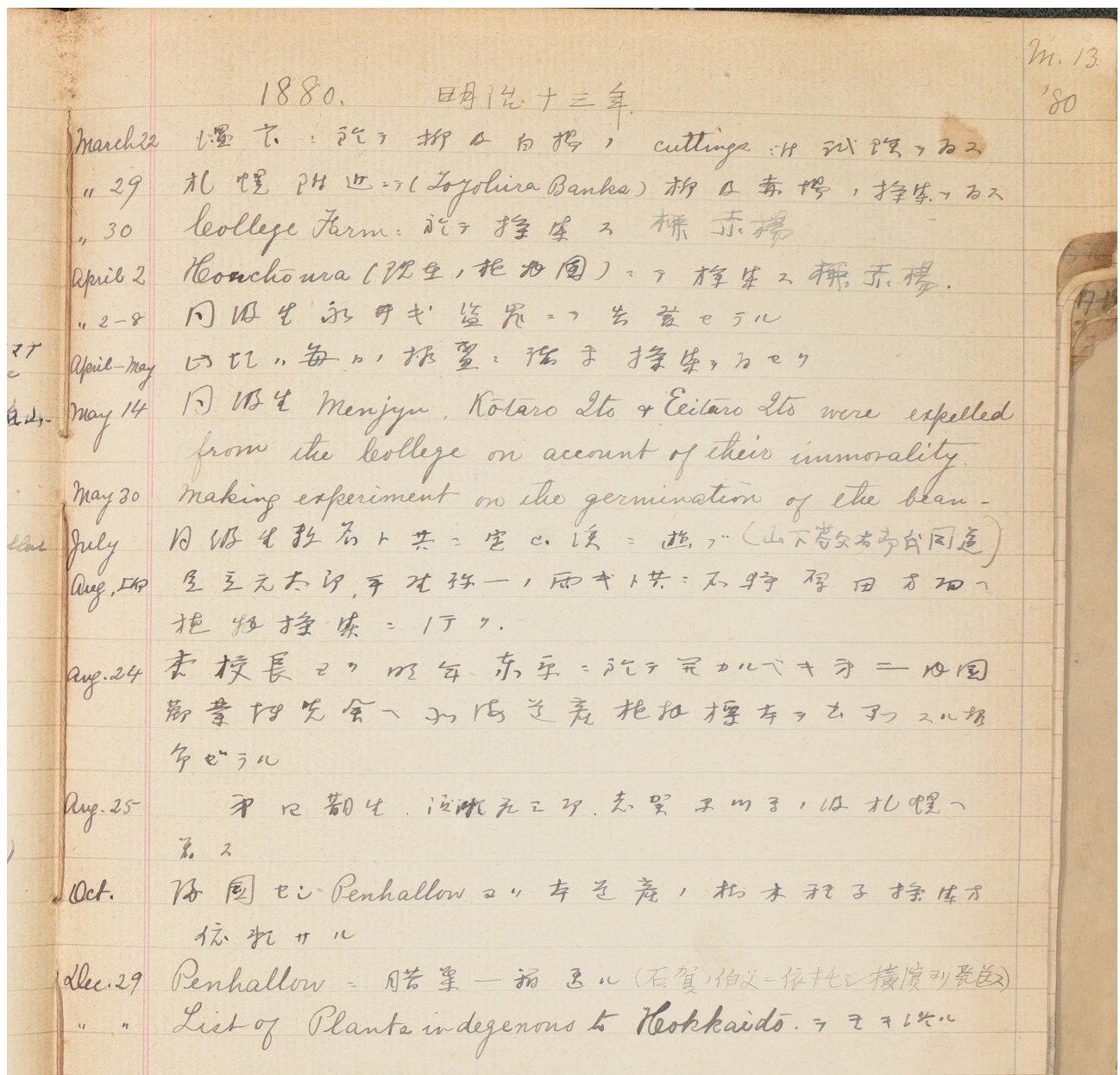


図 12. 「日記抄録」1880 年 (部分)

M. 14.
181.

1881. 明治十四年.

III: 24 第二回内國勸業博覧會へ出品スベキ北海道産植物標本
ノ目録ヲ記載シ終ル

VI: 10 第二回内國勸業博覧會へ出品シタル植物腊葉ニ對シ褒状ヲ受ク
其文ニ曰ク北海道所産ノ諸植物ヲ類集乾腊シ科目ヲ
正シテ和漢洋ノ名称ヲ併識ス其注意ノ篤キ頗ル嘉
ス可シ。審査官小野職慈、伊藤圭介、林忠良、手
嶋精一、。審査部長、近藤真琴、田中芳男、。審査副長
丸鬼隆一。審査総長佐野常民。

VII: 9 札幌農学校ヲ卒業シ農學士ノ学位ヲ受ク一札幌農学校

御用係申付居事 准判任官月俸金三拾圓、—— 开拓使、

学務局督學課申付居事、—— 开拓使、

XI: 14 東京大學：所テ札幌學子修ムハ可。

他ノ修學中、月俸金ノ外別ニ高ニ支給ス可一开拓使。

月俸金孔云亦支給スト一开拓使。

Feb. 7 本校モリ卒業生 延ミルニ職務居シハ子門ニハ
月俸金一月、希望ヲ得ナラセシハ"札幌學子ニ對シ
ニ射スル其恩用"云々ヲ報告ス 吾輩ハ札幌札幌學子
文書系新法ヲ見コ

July 21 Heiori, Gumoto, Yamashita, 三ヶト共 = Atenuhabetu
waterfall = 在是ヲ以テ 当地同地 = 札幌川テ札幌、發見 = 經予ス
流ハ四九尺

Aug. 28 廣戸荒寒川沿岸地ヲ農學校用地ト為ス
為メ：踏査ヲ為ス為メ町會合稱ト共ニ云フセ
ルセラル (旅費トシ金ハ田ヲ買取ル)

Aug. 27 佐藤昌介ニ結婚ス

Aug. 1 卒業生札幌ヲ發見ス(浮城ニ?) 余市、岩内、瀬川、
石碓、赤松、釧路ヲ以テ

図 13. 「日記抄録」 1881 年 (部分)

1-2-2. 「一覧」原稿ノート

宮部資料に「自叙伝 242p 北海道植物名稱一覧表の原稿」という付箋がつけられた資料（【mi_772】以下「原稿ノート」）がある。この付箋は四方による整理の際に付されたものと考えられる。中表紙には「北海道草木名稱清單目録 札幌農学校生徒 宮部金吾 纂輯 明治十三年十二月 A List of Plants Indigenous to Hokkaido Arranged according to the Natural System by F. K. Miyabe Class '81 Sapporo Agricultural College 1880」[図 14] とあり、資料名称および記載年次からみて「日記抄録」の 12 月 29 日に書き終えたとするものはこれに間違いない。

内容は、ノートの見開き右ページに「一覧」と類似する自然分類の配列に従った科、属、種小名、分布などの情報が記載され、左ページには「一覧」で植物の名称に付記している解説とほぼ同じ内容や後筆の追加情報が記載されている [図 15]。「一覧」と異なる特徴としては、多数の種記載追加や抹消があるために丁寧な整理が必要ではあるが、第一に記載されている種番号は最大 764 であり、「一覧」の 684 とは合致していない。第二に「一覧」本文では科名を記載した後に各種を記載しているが、「原稿ノート」では科名、属名を記載したうえで、それぞれの属に含まれる種の種小名やシノニムと推定される学名を記載しており、体裁が異なっている [図 15]。第三に「一覧」には確認できない「説」や「譜」の記載があることや、「一覧」には中尾 [1993] が示したように 20 種に「ポーマー」の記載があるが、「原稿ノート」には「一覧」に記載のない種にも「Bohmer, Boh.⁽⁵⁾」をはじめとする人名の記載がある [図 16] など、制作にあたって宮部が収集していた情報が「一覧」にすべては記載されていない点があげられる。

完成時期、記載内容からみて「原稿ノート」は「一覧」を制作するために情報を整理した資料である可能性が高いこと、「一覧」とは異なる体裁の情報整理が行われていることや記載がない情報を含んでおり、宮部が制作に利用した情報源を見出せる可能性があることから、「一覧」を正しく理解するために重要な資料である。本稿では主にこれらの点について留意しながら記載の比較検討を行ってゆく。

(5) ポーマーの正しいスペルは Bohmer である。

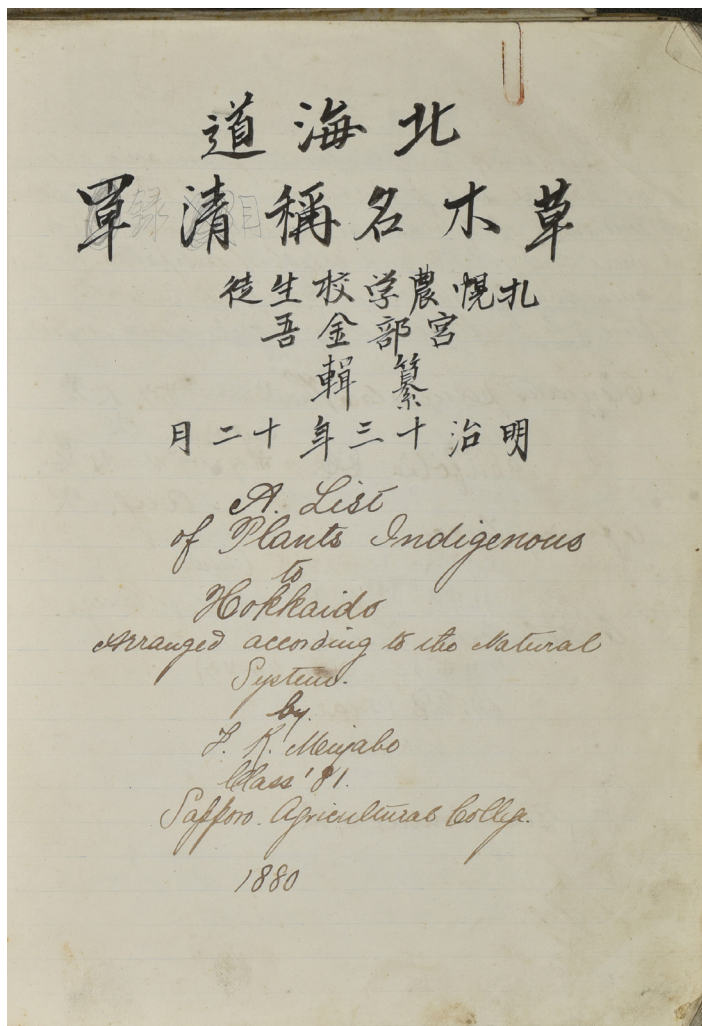


図 14. 「原稿ノート」中表紙

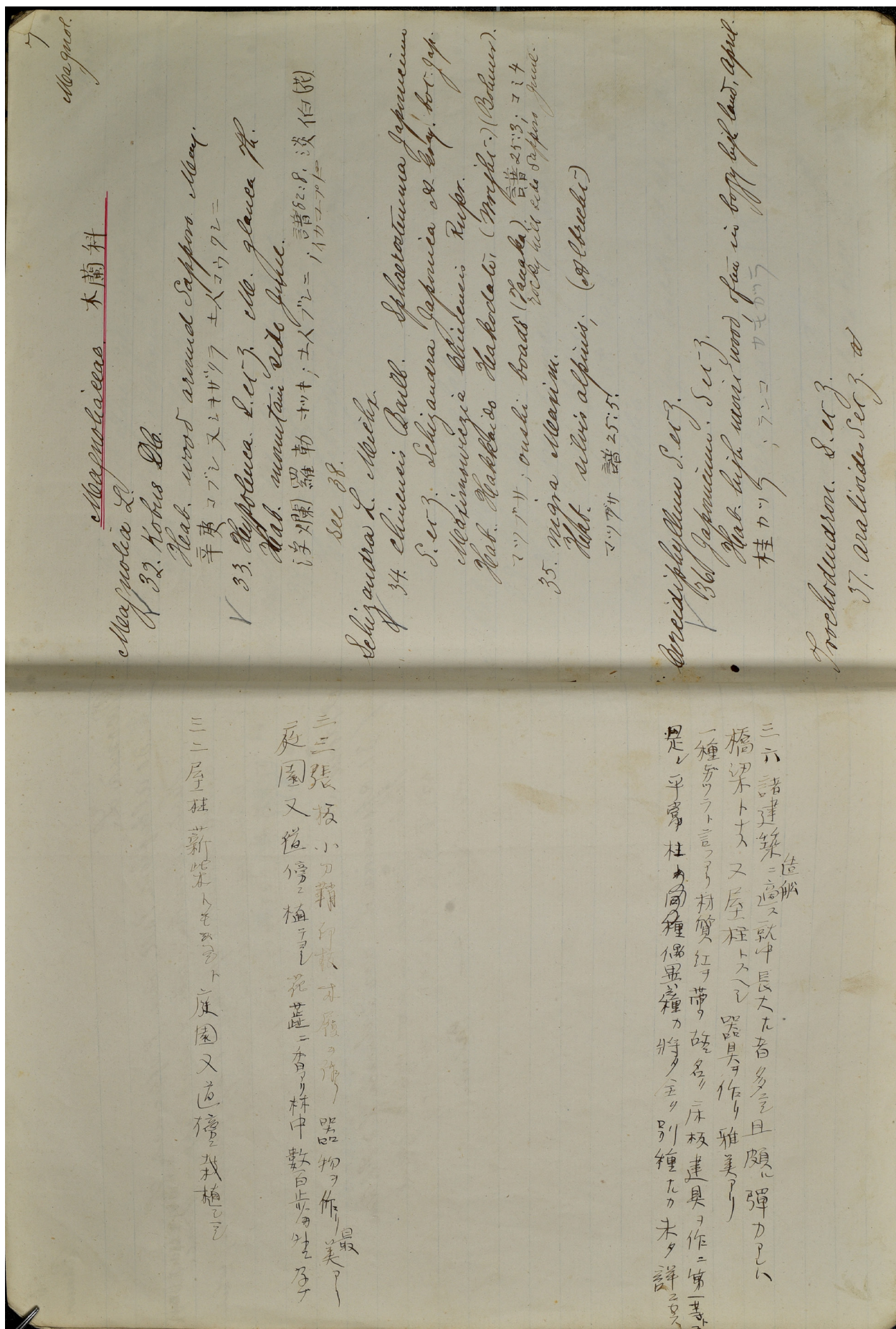


図 15.「原稿ノート」本文

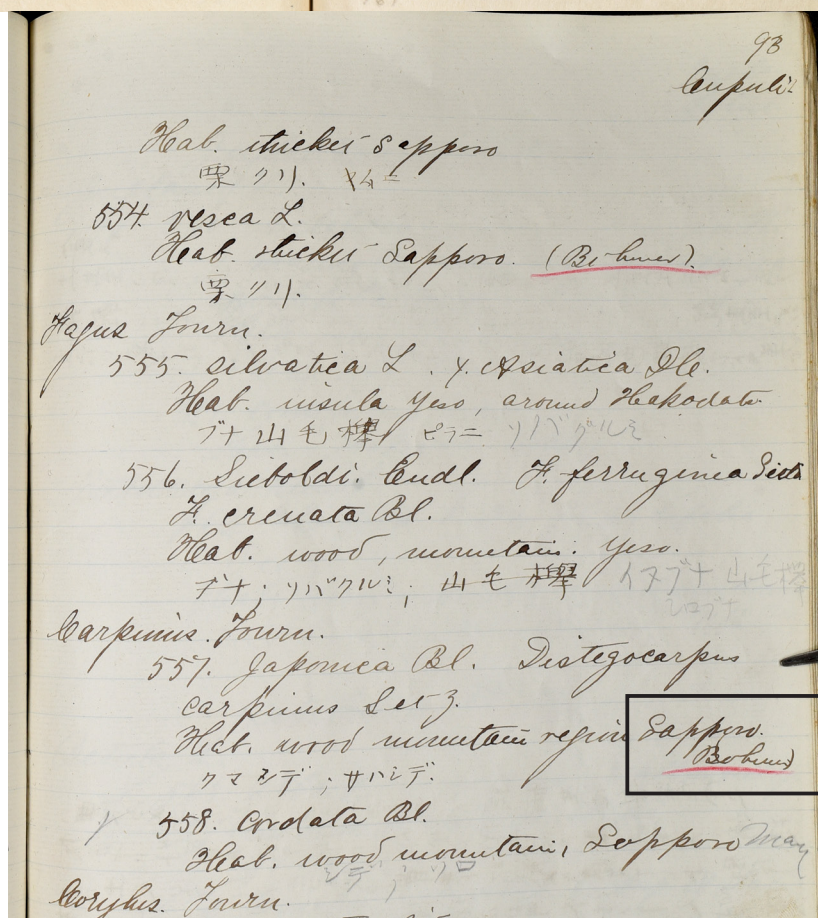
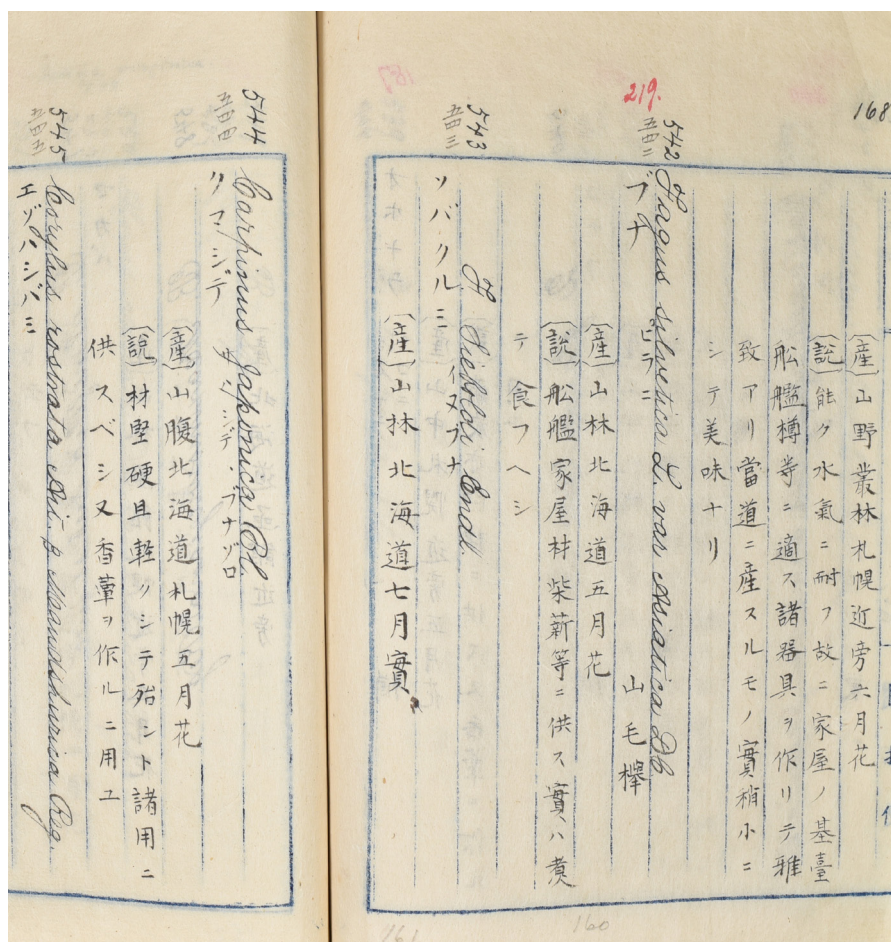


図 16.「原稿ノート」種番号 557 クマシデには「一覽」種番号 544 クマシデにない「Bohmer」の記載がある

1-2-3. 植物標本

博覧会関連資料にみるように、札幌農学校・宮部は北海道産の 500 種 500 枚の植物標本とその名称を記載した目録を第二回内国勸業博覧会に出品していた。現存「一覧」は追記や修正が行われているため出品された目録そのものではないと思われるが、「一覧」表題に「札幌農学校出品」とあることから「一覧」の原形が目録として出品されたものとみてよい。それでは、「一覧」とともに出品された植物標本はどのようなものだったのだろうか。

博覧会が取りまとめた出品目録にあるように、出品標本は厚手の和紙である程村紙に植物体が貼られていたようであるが、HUNHM が管理する宮部資料の中には植物標本は含まれていない。博覧会出品物は希望者に払い下げられるものもあったが、「一覧」と標本は不売品であり、博覧会終了後に出品者である札幌農学校もしくは宮部に返却されたと考えられる。現存する「一覧」が宮部の手元に残された控えではなく実際に博覧会に出品されたものであるならば、標本も宮部に戻された⁽⁶⁾と推測され、出品標本が学術標本として利用できる体裁のものであったならば、宮部は「一覧」の修正とともに標本を活用し続けていたはずである。

ここで、宮部もしくは農学校関係者が採集した植物標本について整理しておきたい。宮部の学生時代に植物学を担当していたペンハローは、学生に対して 200 種の植物を採集し、自分用と農学校に収蔵するための 2 点の標本を作製するようにと指導していた⁽⁷⁾。その結果、ペンハローら外国人教師が農学校の演武場に設置した標本室には、1882 年段階で 1,570 点の押草花標本が所蔵されていた⁽⁸⁾とされる。博覧会に出品された標本が 500 種 500 点であること、札幌近郊で分布を確認していた種が 494 種であったことから考えて、「一覧」の情報や出品された標本は宮部個人で採集したもののみからなるのではなく、農学校関係者が採集し、個人で所有していた標本や農学校の標本室に所蔵されていたものが活用された可能性も考慮して調査を進めたい。

博覧会に出品された標本は和紙に貼られたものであり、現在の植物標本とは異なる体裁であることから標本としては保存されていない可能性もある。しかし、1 点しか所蔵していない種の標本を博覧会に出品するとは考えづらく、農学校や宮部が所蔵する重複標本を利用して出品したと推測されることから、「一覧」に記載がある採集地や採集時期に合致する標本が残されている可能性はあるだろう。また、「一覧」の情報を現在の植物地理学や分類学に利用する場合でも、その根拠となる標本を参照できるようにしておくことは重要である。

「一覧」制作時に農学校が所蔵していた標本は、1884 年に HUNHM の前身にあたる札幌博物場が農学校に移管されたことで博物場に統合された。しかし、1890 年に植物学研究上の都合により 3,640 点の植物標本がキャンパスの植物学教室へと移動されることになる⁽⁹⁾。宮部が個人で採集した標本はこれ以前から自身で管理していたものと推測されるが、この段階で農学校の植物標本のすべてが宮部の手元に集約されたことになる。その後は、農学部植物学教室の標本庫での管理を経て、現在は北大総合博物館の陸上植物標本庫 (SAPS) に引き継がれている。SAPS 所蔵標本から「一覧」に関係する標本を探索し、博覧会出品標本が現存しているのかを確認することとしたい。

本報告では「一覧」の科配列順に、現在の分類体系で該当する科の標本を調査する。調査・抽出対象は「一覧」の内容に則して 1881 年以前に北海道で採集されたものとしたが、「一覧」に修正があることを考慮して、19 世紀中に採集された標本についても調査対象とし、採集情報やラベルの体裁、記載などから「一覧」との関係を検討する。

1-2-4. 宮部が利用した文献など、その他資料

「一覧」の制作経緯を検討するうえで、宮部がどのような文献を利用したのかを把握することは、「一覧」の記載の根拠を理解するために重要であり、同時に当時の札幌農学校における研究・教育の環境を理解する上でも重要である。まず、「一覧」の凡例を確認する。

凡例

- 一 此編ハ今般内国勸業博覧會ニ出品シタル草木腊葉ノ名稱ノ外、更ニ當道ニ産スル他ノ數種ヲ増加シ、各種ニ附スルニ其産地ノ性質開花或ハ結實ノ季節ヲ以テシ、又其ノ解説ヲ要スル者ニハ逐條之ヲ掲載ス
- 一 出品外ノ草木ハ本使御雇米人ルイス、ビィマア氏ノ明治七年中北海道諸州ニ於テ採蒐セル腊葉ノ目録及ヒフレンシ

(6) 1883 年に開催された第一回水産博覧会では、開拓使廃止後に設置された札幌県の関係者が他府県の優れた出品物や札幌県下の個人が出品したものを購入し活用しようとしていた [加藤 2021]。開拓使も同様であったとするならば、受賞した「一覧」と標本を札幌本庁の博物館である札幌博物場（現在の HUNHM）に所蔵しようとした可能性もある。しかし、開拓使時代やそれ以降の時期の HUNHM 所蔵資料に関する記録には該当する資料が確認できない。また、第一回、第二回内国勸業博覧会関連の開拓使資料は HUNHM に引き継がれているが、これらの博覧会に農学校が出品したものに関連する賞状などは含まれていないことから、「一覧」と標本は農学校に返却されたと考えるべきである。

(7) 「2nd Annual report of Sapporo Agricultural College, 1878」[開拓使 1878-1886]。

(8) 北海道大学大学文書館所蔵 札幌農学校簿書 123 「十五年六月開拓使ヨリ農務局へ引継目録」。

(9) 北大大学文書館所蔵 札幌農学校簿書 405 「二十三年公文録 四冊之内 校員 生徒 雑件」。当該年度の年次報告書には移管先として「本校講堂内」とあるが、この簿書に含まれる報告原稿には、標本の移管先として「植物学主任者」とあり、宮部の手元に標本が移動したことが知られる。

エー サバチエー両氏ノ著ハサレタル大日本植物綱目其他三四ノ書中ヨリ抄録スル者ナリ

一 各種ニ附スル所ノ畧符〔産〕ハ産地則チ自然ノ適地、〔説〕ハ解説（効用形状等）ノ畧ナリ

凡例にあるように、宮部は博覧会に出品できなかった種については、ペーマーが1874年に北海道各地で行った植物採集調査⁽¹⁰⁾の標本目録とフランシェ・サバチエの「大日本植物綱目」[Franchet & Savatier 1875-1879]、その他3、4種の文献を参照したとする。本報告では名前が判明しないその他の文献がどのようなものであったのかについても検討したい。

ペーマーが採集した標本は、詳しい同定のためにハーバード大学のグレイに送付されたのちに東京大学の所蔵標本となった[Miyabe 1932; 宮部 1953]が、標本目録の現状は不明である。ペーマーが開拓使に雇用されていたことから、目録は開拓使札幌本庁に所蔵されていたと推測され、宮部が利用できた資料は農学校に所蔵されていた文献のみではない可能性はある。しかし、宮部が開拓使のどの部署の文献を利用できたのか、また開拓使がどのような文献を所蔵していたのかについては今のところ判断としない。

1880年以前の日本産植物に関する主要文献としては、宮部が自叙伝[宮部 1953]で記述するように、フランシェ・サバチエの他にはシーボルト[Siebold et al. 1835-1870]、ツンベルク[Thunberg 1784]、マキシモヴィッチ[Maximowicz 1866-1876]、ミクエル[Miquel 1866-1867]、日本人が執筆したものとしてはリンドレーの文献[Lindley 1862]⁽¹¹⁾を翻訳した『植学訳箋』[小野・田中 1874]、デカンドルの分類体系を翻訳した『植物自然分科表』[埜甘度爾列・田中 1872]、アイヒラーの文献[Eichler 1880]を翻訳した『植物綱目撮要』[松原 1879]などが想定される。

実際に、「一覧」の種番号33「*Schizandra nigra*, Max.」にはマキシモヴィッチの協力者である「アルブレット」の名前が記載されている。このほか、種番号58の「*Cardamine sylvatica*, Link. var. *regeliana*, Miq.」には「スモール」の名前があり、これは1854年にアメリカのロジャース艦隊に加わっていた2名の植物学者ライト(Charles Wright)およびスモール(J. Small)が採集した標本の情報と考えられる。この標本群はペリー艦隊に同行したウィリアムス(Samuel Wells Williams)とモロー(James Morrow)が採集した標本とともにグレイが報告しており[Gray 1856, 1859]、宮部が参考とした可能性はあるだろう。さらに「酒井」という日本人の名前も散見され、これらの記載から「一覧」の情報源を把握できることが期待できる。

ただし、東京大学内国留学時の状況を宮部が記しているように、マキシモヴィッチの文献は当時札幌農学校だけでなく東京大学にも所蔵されておらず、農商務省博物局の田中芳男所蔵のものを借用して利用したとすることから、「一覧」制作段階では利用できなかったことは明かである。「一覧」に採集者名があったとしても、当該標本の報告書ではなく、孫引きをしていた可能性も考慮に入れる必要がある。また、館脇が「一覧」の配列の根拠とした「ベンサム、フッカー両氏」の文献[Bentham & Hooker 1862-1883]は、宮部が東京留学時代に参照していたことは把握できるものの、「一覧」制作段階では完結していないこと、後述する札幌農学校の蔵書目録では所蔵されていた形跡がないこと、宮部が利用できたGray[1879]⁽¹²⁾では、その体系の一部が紹介されているのみであることにも注意が必要である。

本稿では宮部が利用できた、あるいは利用できなかった文献を調査するために農学校および関係者が所蔵していた文献を示す以下の目録類を参照した。

- ・『Catalogue of Books Library of the Sapporo Agricultural College arranged according to subjects. May 1888.』⁽¹³⁾
- ・『明治二一年一二月調 札幌農学校和漢書籍目録』⁽¹⁴⁾

2冊とも札幌農学校が刊行した蔵書目録である。前者は1888年段階の所蔵洋書を分野ごとに整理したもので、「Botany」の項ほかにあげられている植物学関係図書を表1に示した。農学校の外国人教師の多くがマサチューセッツ州出身であったことも反映しているのか、「一覧」制作の1880年以前に出版されたものに限定すればグレイの植物関連のテキストが多くを占めており、かつ学生に利用させるために所蔵部数も多かったことがみてとれる。なお、「Botany」の項には宮部が「一覧」制作に参照していたフランシェ・サバチエの著書[Franchet & Savatier 1875-1879]が掲載されていないが、これは「French」の項にある。また、「Latin」の項にツンベルク[Thunberg 1784]とミクエル[Miquel 1866-1867]の著書が含まれている。今回利用した目録は宮部旧蔵のものであり、植物学関連の図書の一部にチェックが入れている[図17]ことからみて、1888年以前に農学校に整備されていたこれらの図書を何らかの形で活用していたことが確認される。

後者は和漢書の目録で、「本校ノ部」と「農芸伝習科ノ部」からなる。利用した目録は表紙に「池田用」と記載があり、印刷刊行された目録に追加や補記の別紙が綴じられている。⁽¹⁵⁾「本校ノ部」の本草書類、「農芸伝習科ノ部」の植物学書類にあげられて

(10) 採集の報告書は「Reports and official letters to the Kaitakushi」[Capron 1875]、「開拓使顧問 ホラシ・ケブロン報文」[ケブロン・開拓使外事課 1879]に含まれている。後述する宮部文庫には英文の報告が含まれている。

(11) リンドレーの文献の初版年は1845年だが、小野・田中が利用した可能性の高い1862年版を参照した。

(12) Bentham & Hooker [1862-1883]は、後述する札幌農学校文庫、宮部文庫のいずれにも含まれていない。北海道大学農学部植物学教室旧蔵のものには「札幌農学校」時代の蔵書印はなく、「北海道帝国大学」時代に購入されたものであることから、少なくとも札幌農学校時代に宮部が利用できていなかった可能性が高い。

(13) 附属図書館貴重資料室・宮部金吾文庫所蔵、資料番号0172497906。

(14) 附属図書館貴重資料室・札幌農学校文庫所蔵、資料番号0181328135。

(15) 宮部旧蔵(附属図書館貴重資料室・宮部金吾文庫所蔵、資料番号0172488654)の同目録には追加・補記はされていない。

表 1 札幌農学校洋書目録 植物学関連図書の記載

Part I. Botany の項								
チェック	図書 番号	著者名	書名	出版年	No. of Copies	No. of Vol.	Total No. of Vol.	備考
	1507	Allen, G.	Flowers and Their Pedigrees	1884	1	1	1	
有	1539	Archer, T.C.	Profitable Plants	1865	2	1	2	
	1505	Baldwin, H.	Orchids of New England	1884	1	1	1	
有	1326	Balfour, J.H.	A Manual of Botany	1875	1	1	1	
有	1287	Bessey, C.E.	Botany	1881	19	1	19	12 と補記
	1506	Bower, F.O. & Vines, S.N.	Practical Botany	1885	1	1	1	
	712	Carpenter, W.B.	Vegetable Physiology Systematic Botany	1875	1	1	1	
有	1258	Cooke, H.C.	Fungi	1880	1	1	1	
	943	Darwin, C.	Insectivorous Plants	1875	1	1	1	
	1358	Darwin, C.	The Movements & Habits of Climbing Plants	1884	1	1	1	
	1359	Darwin, C.	The Different Forms of Flowers on Plants of the Same Species	1884	1	1	1	
	1361	Darwin, F.	The Power of Movement in Plants	1883	1	1	1	
	1501	De Bary, A.	Comparative Anatomy of the Vegetative Organs of the Phemrogams and Ferns	1884	2	1	2	
	1499	De Candolle, A.	Origin of Cultivated Plants	1885	1	1	1	
	946	Embury, E.C.	American Wild Flowers	1845	1	1	1	
有	1508	Goodale, G.L.	Gray's Botanical Text-Book Vol. II: Physiological Botany	1885	21	1	21	
	1363	Gray, A.	Botany of Young People. How Plants Behave	1875	1	1	1	
	1504	Gray, A.	Gray's Botanical Text-Book Vol. I: Structural Botany	1879	21	1	21	
	1582	Gray, A.	Field, Forest, and Garden Botany	1875	1	1	1	
	453	Gray, A.	Lessons in Botany	1876	20	1	20	現物は 1877 年版
	73	Gray, A.	New Lessons and Manual of Botany	1885	19	1	19	
	710	Gray, A.	School and Field Book of Botany	1870	1	1	1	
	951	Gray, A.	Structural and Systematic Botany	1873	1	1	1	
有	1502	Hervey, A.B.	A Guide to the Micorcope in Botany	1885	1	1	1	
有	871	Hooke, J.D.	Synopsis Filicum	-	1	1	1	
有	1362	Hooke, J.D.	Descriptive and Analytical Botany	-	1	1	1	
	1363	Hooke, J.D.	The Students of Flora of the British Islands	1884	1	1	1	
	763	Hooper, J.	Book of Evergreens	1868	1	1	1	
有	54	Lindley & Moore	Treasury of Botany	-	1	2	2	
	779	Lubbock, J.	On British Wild Flowers	1875	1	1	1	
	784	Marion, F.	Wonders of Vesitation	1874	1	1	1	
	443	Moore, T.	The Elements of Botany	1865	1	1	1	
	1503	Muller & Herman	The Fertilization of Flowers	1883	1	1	1	
	963	Newman, J.B.	Beauties of Flora	1884	1	1	1	
	178	Oliver, D.	Lessons in Elementary Botany	1870	1	1	1	
	823	Sachs, J.	Text-Book of Botany	1 : 1875 /2 : 1882	3	1	3	
	1637	Smith, J.	Dictionaly of Economic Plants	1882	1	1	1	
	1635	Troussart, E.L.	Microbes, Ferments, Moulds	1886	1	1	1	
	974	Wood, A.	The American Botanist and Florist	1870	1	1	1	
	875	Wooster, D.	Alpine Plants	1874	1	2	2	
Part II. Botany の項								
チェック	図書番号	著者名	書名	出版年	No. of Copies	No. of Vol.	Total No. of Vol.	備考
	1866	Apgar, E.A.	Plant Analysis	-	1	1	1	
	1867	Balfour, J.H.	Second Book of Botany: An Introduction to the Study of Systematic and Economic Botany	-	1	1	1	
	1682	Behrens, W.J.	Text-Book of General Botany	1885	1	1	1	
	1683	Bower, F.O. & Vines, S.N.	A Course of Pratical Introduction in Botany Pt. II	1887	1	1	1	
	1868	De Bary, A.	Caomparative Morphology and Biology of the Fungi, Mycetozoa and Bacteria	1887	1	1	1	
	1684	Goebel, K.	Outlines of Classification and Specian Morphology of Plants	-	2	1	2	
	453	Gray, A.	Lessons in Botany and Vegetable Physiology	-	5	1	5	
	1685	Oliver, D.	First Book of Indian Botany	1885	1	1	1	
Part I. 他の項から抜粋 以下図書番号の記載がないため、分類されている項名を示す								
チェック	項名	著者名	書名	出版年	No. of Copies	No. of Vol.	Total No. of Vol.	備考
有	French	Franchet et Savatier, L.	Enumeratio Plantarum in Japonia Sponte Crescentium	-	1	2	2	
有	German	Constantin	Beiträge zur Kenntniss der Flächen-Skelete der Farnkräuter	1864	1	1	1	
有	German	Schmidt, Fe.	Reisen im Amur-Lande und auf der Insel Sachalin	1868	1	1	1	
有	Latin	Maquel, F.A.[ママ]	Florae Japonicas	-	1	1	1	
有	Latin	Thunberg	Flora Japonica	1784	1	1	1	

— 16 —

		No. of Copies.	No. of Vol.	Total No. of Vol.
942.	Clark, L. L. Objects for the Microscope	1870	1	1 1
1267.	Cutter, G. R. Frey on Microscope and Microscopical Technology	1880	1	1 1
488.	Hogg, J. The Microscope	1867	1	1 1
767.	Huxley, T. H. Practical Biology	1877	1	1 1
1129.	Letoumear, C. Biology	1878	1	1 1
1273.	Nicholson, H. A. Biology	1880	19	1 19
935.	Phin, J. How to use the Microscope	1877	16	1 16
1579.	Spencer, H. Principles of Biology	1886	1	2 2
BOTANY.				
1507.	Allen, G. Flowers and Their Pedigrees	1884	1	1 1
1539.	Archer, T. C. Profitable Plants	1865	2	1 2
1505.	Baldwin, H. Orchids of New England	1884	1	1 1
1326.	Balfour, J. H. A Manual of Botany	1875	1	1 1
1287.	Bessey, C. E. Botany	1881	19	1 19
1506.	Bower, F. O. & } Vines, S. N. }	1885	1	1 1
712.	Carpenter, W. B. Vegetable Physiology and Systematic Botany	1875	1	1 1
1258.	Cooke, H. C. Fungi	1880	1	1 1
943.	Darwin, C. Insectivorous Plants	1875	1	1 1
1358.	„ „ The Movements & Habits of Climbing Plants	1884	1	1 1
1359.	„ „ The Different Forms of Flowers on Plants of the Same Species	1884	1	1 1
1361.	„ F. The Power of Movement in Plants	1883	1	1 1

*Dufour	Atlas	1	1	1
Duruy	Histoire du Moyen Age	1870	19	1 19
„	„ „ Ancienne	19	1	19
„	„ „ Romaine	19	1	19
„	„ „ Grecque	19	1	19
„	„ „ France	19	1	19
„	„ „ Sainte	4	1	4
„	„ „ Temps Moderne	19	1	19
Franchet et Savatier, L.	Enumeration Plantarum in Japonia Sponte Crescen- tium	1	2	2
Ganot, A.	Cours de Physique	1872	8	1 8
„ „	De Physique	1872	8	1 8
Guizot, M.	Histoire Civilization en Français	1	3	3
„ „	„ „ „	1	4	4
„ „	„ „ „	1	1	1
Huchette et Cie, Pub.	Alphabet et Premier Livre De Lecture	17	1	17
*Dupont	Jurisprudence des Mines	1	3	3
Jewell	Ollendorff's French Language 1871	16	1	16
„	Key to Ollendorff's French Language	1871	12	1 12
Knechet, M.	Lithographie-et Atlas	1867	1	1 1
Kōjudō	Dictionnaire Français Jap- onais	2	1	2
Laurent	Guide du Soudier	1861	1	2 2

図 17. 宮部旧蔵の札幌農学校洋書目録. 一部の文献にチェックが入れている

いる図書を表 2 に示した。「大和本草」など江戸時代の本草書が多く、「一覧」制作にあたって参考にすることができた西洋植物学文献の翻訳書などは含まれていない。

これらのほか、宮部自身が所蔵していた図書も検討に加える。附属図書館が公開している宮部文庫目録には 2,423 冊が登録されているが、これらはあくまで附属図書館が現在管理している宮部旧蔵書のみが対象である。宮部の蔵書印がある図書は学内他部局に分散していたり、散逸して古書店で販売されているものも確認されていることから、あくまで「宮部が利用できた文献の一部」として利用する。さらに、これらは 1952 年の退官までに宮部が入手した文献であり、「一覧」制作段階ですべてを所蔵していたわけではないことにも注意が必要である。フランシエ・サバチェの著書は宮部文庫に含まれているが、その Vol.1⁽¹⁶⁾には「Nov.1881 Tokio」、Vol.2⁽¹⁷⁾には「Feb.1885 Tokio」の書き込みがある。「日記抄録」の 1881 年 9 月 28 日の項には「家兄ヨリ宮部家財産中ヨリ卒業祝トシテ公債証書額面五百円（時價三百六十円）ヲ貰ヒ受ケ、其ニテ直ニ丸善ニ於テ書籍ヲ購入ス」という記載があり、卒業後に購入したものである。札幌農学校学生時代には「一覧」凡例にある文献を個人では所持していなかったことが理解できる。⁽¹⁸⁾

これらに加え、宮部資料として HUNHM が管理している宮部の蔵書目録【mi_785】、和漢書目録【mi_783】も参考とする。これらは記載方法からある時期に一括して蔵書を整理したものと考えられ、「一覧」制作時に利用できた文献を把握することはできないが、附属図書館の宮部文庫目録の欠を補うことができる可能性がある。⁽¹⁹⁾

さらに、附属図書館の札幌農学校一期生、二期生の個人文庫目録も参考として利用する。宮部文庫目録には農学校の洋書目録にあるグレイの『Gray's lessons in botany.』[Gray 1868] は含まれていないが、佐藤昌介、南鷹次郎、新渡戸稲造文庫の目録に

(16) 附属図書館貴重資料室・宮部金吾文庫所蔵、資料番号 0172493822。

(17) 附属図書館貴重資料室・宮部金吾文庫所蔵、資料番号 0172493833。

(18) このほかにも Gray[1880]『Structural botany or organography on the basis of morphology』は「一覧」完成後の 1881 年 4 月 3 日に、Gray [1876]『Manual of the botany of the Northern United States, including the district east of the Mississippi and north of North Carolina and Tennessee, arranged according to the natural system』は 1882 年 4 月 24 日に東京で、Le Maout et al. [1876]『A general system of botany descriptive and analytical』は 1883 年 7 月 17 日に東京で、Eichler [1880]『Syllabus der Vorlesungen über specielle und medicinisch-pharmaceutische Botanik』は 1887 年 11 月に留学先のケンブリッジで入手したという記載があり、宮部はこれらの文献を「一覧」制作に所蔵しておらず、利用できなかった。

(19) 遺族から寄贈されたものではなく、古書店から HUNHM が購入したもの。

表 2 札幌農学校背巻書籍目録 植物学関連図書の記載

本校ノ部 本草書類の項						
番号	著訳訓點者		書目	発兌年限	冊数	部数
360	清	陳湊子 訂輯	秘傳花鏡	不詳	6	2
361		貝原篤信 編輯	大和本草	宝永五年	10	1
362	小野蘭山口授	小野蕙歆録	重訂本草綱目啓蒙	弘化四年	24	1
374	明	徐光啓纂輯 松岡玄達訓點	救荒本草	享和元年	8	1
178		伊藤圭介著	日本植物図説	明治七年	1	1
179		薺田充房撰	華彙	明和二年	8	1
230	明	李時珍撰	本草綱目	不詳	41	1
414		清原重巨撰	草木性譜	文政六年	3	1
226	清	王象晋著	佩文齋廣群芳譜	康熙四十七年	48	2
424		岩崎常正著	本草図譜	文政十一年	47	1
457		清原重巨撰	有毒草木図説	文政十年	2	2
496		松村任三編纂	日本植物名委	明治十七年	1	2
562		安本徳寛編	植物書	明治十九年	1	1
564		帝国大学編纂	植物標品目録	明治十九年	1	1
566		東京大学編輯	小石川植物園草木図説	明治十四年	2	1
571		田中芳男 小野職愷同撰	草木図説目録	明治七年	1	1
584		伊藤圭介撰	草木乾さく法	明治八年	1 葉	1
590		飯沼愨齊著	新訂草木図説	明治七年	10	1
598		獨国 ゴイベルト氏原著 丹波敬三他同訳	普通植物学	明治十九年	1	1
30	清	李善蘭筆述 訓點者不詳	植物学	慶応三年	3	1
88		吉田健作録	草木移植心得	明治九年	1	1
483	米国	クレー氏原著 文部省編輯局訳	植物通解	明治十七年	1	1
369		山本亡羊著	百品考	天保九年	4	1
追加分						
330		伊藤圭介著	日本産物誌		11	1
573		博物館編	有用木材捷覧 初編		1	1
704		三好学著	中等教育植物学教科書		2	2
707		三好学著	植物自然分科一覽表		1	1
721			質問本草写本		8	1
732			日本製品図説		2	1
764			草本育種 後編		2	1
814		矢田部良吉著	日本植物図解		1	1
815		大久保編	植物学字彙		1	1
816		松村任三著	植物分科要覧		1	1
919		松村任三著	本草字典		1	1
農芸伝習科ノ部 植物学書類の項						
番号	著訳訓點者		書目	発兌年限	冊数	部数
4	英国海軍	韋臣輯述 李善蘭筆記	植物学	咸豊八年二月	6	2
5		宇田川榕庵著	植学啓原	天保四年六月	3	3
24		櫛原芳野校	植学畧解	明治七年六月	1	1
46		博物館	有用木材捷覧	明治九年三月	1	1
133		岡林清遠著	物品識名	文化己巳十月	4	1
368		稲義彰信甫訂補	本草綱目	扶養	45	1
378		小野職孝士徳録	本草綱目啓蒙	弘化丁未仲夏	58	2
370		岩川友太郎著	生物学語彙	明治十七年五月	1	1
371		松村任三著	植物標本目録	明治十八年	1	1
212		矢田部良吉訳	植物通解	明治十九年十月	25	25
372		向井元升著	庖樹和名本草	寛文壬子年七月	10	1
373		貝原篤信編録	大和本草	宝永戊子四月	10	1
374		魯槃士考輯	本草纂疏	寛政十年五月	14	1
375		坂本浩然輯録	菌譜	天保五年仲秋	2	1
376		舍人清原重臣輯	有毒草木図説	文政十年	2	1
377		阿部喜任著	草木育種	文化十五年	2	1
377		岩崎常正著	全前編	文化十五年	2	1
379		男彦安職實録	救荒本草啓蒙	天保十三年十月	4	1
380		舍人清原重臣輯	草木性譜	文政六年仲秋	3	1
381		後藤先生黎春著	物品同録	宝暦二年三月	2	1
382		深江輔仁著	本草和名	寛政八年	2	1
383		青山種樹金火撰輯	草木奇品家雅見	文政丁亥	3	1
384		梅野屋主人識	草木養活秘録	文政二年	1	1
385		大槻茂質著	薦録	寛政丁巳之冬	1	1
394			紙漉重寶記	寛政十年四月	1	1
408		男彦安職實録	救荒野譜啓蒙	天保十四年	1	1

それぞれ確認できる。1888 年の洋書目録では 1876 年版⁽²⁰⁾が掲載されているが、個人文庫の当該文献は 1868 年版である。おそらくは、新版を入手したのちに旧版の一部は学生に配布されたのではないだろうか。⁽²¹⁾宮部が利用しえた版の取り扱いについても留意しながら調査をすすめる。

このほか、「一覧」完成後に「原稿ノート」や「一覧」に追加や修正が行われていることから、『小石川植物園草木目録』[東京大学理学部 1877-1880]、『小石川植物園草木図説』[東京大学 1881-1883]、『博物館列品目録 天産部 植物類』[内務省博物局 1880]、『植物通解』[グレイ・矢田部 1883]なども参照する。

考察ではここにあげたもの以外の文献も参照することとするが、頻繁に引用するものについては煩雑さを避けるため略称を表 3 にまとめておく。

(20) 表に示したように、農学校文庫や個人文庫に所蔵されているのは 1877 年版である。

(21) 厳密には、1868 年版のタイトルは『Gray's lessons in botany and vegetable physiology, illustrated by over 360 wood engravings, from original drawings, by Isaac Sprague. To which is added a copious glossary, or dictionary of botanical terms.』[Gray 1868]で、農学校文庫の 1877 年版は『Gray's lessons in botany and vegetable physiology, illustrated by over 360 wood engravings, from original drawings, by Isaac Sprague, to which is added a copious glossary, or dictionary of botanical terms ; Manual of the botany of the Northern United States, including the district east of the Mississippi and north of North Carolina and Tennessee, arranged according to the natural system』[Gray 1877]であり、後者は『Manual of the botany of the Northern United States』が合冊されているものである。前者には詳しい分類体系が記載されていないため本稿での比較対象にはならないが、農学校の学生が利用できた文献という点で重要である。また、佐藤昌介と南鷹次郎文庫の 1868 年の書籍は札幌農学校の消印が、新渡戸文庫は「開拓使図書記」の印があり、学生たちに払い下げられたことは確実である。農学校文庫の 1868 年版、1877 年版はすべて「開拓使図書記」の印がある。

表 3 文献略称一覧

略称	文献名	備考
BH	Bentham & Hooker [1862-1883]	
DT	埵甘度爾列・田中 [1875]	
FS	Franchet & Savatier [1875-1879]	
GA75	Gray [1875]	Gray's school and field book of botany : consisting of "Lessons in botany", and "Field, forest, and garden botany", bound in one volume として合冊版になっているものを含め、1870, 1872, 1875, 1877, 1881, 1887 版を参照した
GA79	Gray [1879]	名称が変更されているものを含め、1857, 1864, 1875, 1876, 1879 版を参照した
GY	グレイ・矢田部 [1883]	
IT	岩川 [1884]	Gray 文献の用語を翻訳したもの
MG	Miquel [1866-1867]	
MS	松原 [1879]	
MY	松村・矢田部 [1884]	
OT	小野・田中 [1874]	

1-3. ベーマーと宮部の調査地

「一覧」には各植物の分布が記載されている。この情報が宮部自身の採集調査に基づくものであるのか、ベーマーらの先行調査の結果に基づいているのかを把握する必要がある。

宮部が札幌農学校在学中に最も盛んに採集調査を行った時期は第三年級から最終学年の一学期までで、主たる採集地は農場樹林地、本校裏、円山、藻岩山、軍艦岬、砥石山、豊平川付近、平岸など札幌周辺のみが対象だった（日記抄録⁽²²⁾）。卒業後、宮部は帰省と内地留学のため東京へ向かったが、その際に道南地方の植物景観を把握するため〔宮部 1953〕に、通常の船を利用した経路をとらず小樽、余市、岩内、磯谷、潮路、黒岩、森を経由して函館に到着している（日記抄録）。ここから、「一覧」において産地に「函館」など、札幌周辺以外としているものは、宮部自身が調査したものではない可能性が高い。

ベーマーの調査経路はケブロンに提出された報告書に掲載されているので、表4に整理しておく。函館を出発し、渡島半島をへて札幌から千歳勇払、太平洋岸を通り道東までを往復している。

(22) 中尾〔1993〕が宮部の調査地を詳細に触れているのは、日記抄録の情報を得たためと推測される。

表4 ベーマーの1874年植物調査旅程 ケブロン・開拓使〔1879〕に基づく

日付	地名	地方	日付	地名	地方
5.21-7.4	函館		8.27	広尾迄	東海岸
7.4	七重迄		8.3	大津迄	東海岸
7.9	森迄	噴火湾海岸	9.2	久寿里迄	東海岸
7.1	山越内迄	噴火湾海岸	9.3	チブラン迄	東海岸
7.12	長万部迄	噴火湾海岸	9.4	厚岸迄	東海岸
7.13	黒松内迄	地方	9.8	昆布森迄	東海岸
7.15	歌棄津ヲ経テ磯谷迄	西海岸	9.9	白糠迄	東海岸
7.17	岩内迄	西海岸	9.1	大津迄	東海岸
7.18	泊り迄	西海岸	9.11	広尾迄	東海岸
7.19	古宇迄	西海岸	9.12	幌泉迄	東海岸
7.22	シャコタン迄	西海岸	9.13	様似迄	東海岸
7.24	古平迄	西海岸	9.16	静内迄	東海岸
7.26	余市迄	西海岸	9.2	沙流迄	東海岸
7.27	小樽迄	西海岸	9.21	勇払迄	東海岸
7.28	札幌迄	地方	9.24	千歳迄	地方
8.5	定山溪迄	地方	9.26	札幌迄	地方
8.1	札幌ニ帰ル	地方	10.1	篠路通り石狩迄	西海岸
8.1	島松部迄	地方	10.5	帰路札幌迄	地方
8.15	千歳迄	地方	10.9	島松部迄	地方
8.17	勇払迄	東海岸	10.10	千歳迄	地方
8.2	沙流迄	東海岸	10.11	苫前迄?	東海岸
8.23	静内迄	東海岸	10.13	白光迄?	東海岸
8.24	浦河迄	東海岸	10.14	ホロベツ迄	東海岸
8.25	様似迄	東海岸	10.15	新室蘭迄	東海岸
8.26	幌泉迄	東海岸	10.19	蒸気雷電丸ニテ函館迄	

2. 結果および暫定的な考察

2-1. 「一覧」と「原稿ノート」の分類配列比較

はじめに、「一覧」および「原稿ノート」がどのような分類体系に従っているのかについて調査を行った。この際、参照する分類体系については表3にまとめた文献略称で表記する。

(上位分類)

「原稿ノート」と「一覧」の科より上位の分類学名表記の差異について表5に整理した⁽²³⁾。相違点としては、「一覧」では「Monocotylae」が3ディビジョンに分けられているのに対し、「原稿ノート」では分類されていないことと、「原稿ノート」では「Cryptogamae」が2クラスに分けられているのに対して「一覧」では1クラスになっていることがあげられる。この相違は、「原稿ノート」が宮部の調査に加え複数の文献を参考にして情報が集約されていたのに対し、「一覧」は完成形として何らかの分類体系に即して整備されたという背景が反映されている可能性があるだろう。厳密な考察は、科レベルの配列や属、種レベルでの記載の調査の上で実施しなければならないが、ここでは宮部がBHに従ったと館脇[宮部 1953]が述べていることについて確認してみたい。

表5にはBH、FSとGA75、GA79の上位分類群の学名を比較としてあげた。BHの「Monochlamydeae」以降を斜体としているのは、「一覧」完成段階で刊行されていなかった第3巻の情報であることによる。またBHにおいて括弧で示した表記は、宮部が利用することができたGA79で紹介されているBHの「Dicotyledons」部分の体系の記載である。比較した分類体系はいずれも自然分類に従っており大きな違いがあるわけではないが、宮部が利用する学名や「Monocotylae」の3ディビジョン⁽²⁴⁾、「Cryptogamae」の記載をみれば「一覧」はBHやFSではなく、GA75との類似性が極めて高いことが把握できるだろう。

宮部自身がBHの方式に従ったとする業績は、「一覧」完成後の東京大学留学中にまとめた『北海道志』と、札幌で利用できなかった文献を利用して整理した北海道樹木標本目録である[宮部 1953]。「一覧」の配列と宮部が札幌でBHを利用できた環境にはなかったことを考えると、館脇の記述を再検討する必要があると示唆される。

次に、上位分類群の和名について検討する。宮部が利用した和名と、その前後に刊行された文献で採用されている和名を表6にまとめた。それぞれの翻訳書が依拠した分類体系が異なるため、正確な比較とは言えないが、「顕花植物」、「栓花」、「粗花」などはMSの翻訳語との類似性がみられる。一方で、MSが翻訳対象としていない隠花植物の「上長部」や「通長部」はOTやDTと共通している。この点から、宮部はMSを参考としつつ不足分をその他の文献で補ったと考えることもできるが、農学校にはOT、DTは所蔵されていないこと、宮部文庫にMSは含まれているが、入手時期が不明であり、かつ利用形跡がほとんどない状態であること、「被子」を他文献では全く確認されない「包子」という用語を利用していることを考慮すると、宮部が独自に翻訳した可能性もある。この点については、科レベル、種レベルでの和名の利用方法を確認しつつ考察を続けたい。

(科レベル)

次に科レベルの配列から、「一覧」制作にあたり宮部が利用した文献を検討してみたい。

「一覧」と『北海道志』の比較からみた特徴

まず、上位分類で疑念が示唆された「一覧」がBHに準拠しているという館脇の見解について確認する。表7に「一覧」と『北海道志』の科名(和名)を配列順に示した。

裸子植物の松柏科(C_78、H_78)以降の配列は共通しているが、前半部分の配列がかなり異なっていることがわかる。これをBHおよびFSの科名配列番号と比較してみると、『北海道志』はBHではなくFSの配列と合致していることがわかる。特にBH第3巻で取り扱われる「無辨花植物」以降との配列の違いは明確であり、『北海道志』執筆の前年に刊行されたBH第3巻を宮部は利用することができなかったのだろう。宮部自身は『北海道志』はBHに従っているとするが、これはBHが自然分類配列を代表する分類体系であることによるもので、個別の情報整理にあたってはその都度利用できた文献に従っていた可能性が

(23) 宮部は分類名を基本的に「-ae」で終えているが、他の分類体系ではPtantsやDivisionにつなげているため、「-ous」としている。これらの差異は本稿では無視している。

(24) グレイの分類体系には、文献の違いによって3系統が存在する。GA75とした「Field, Forest, Garden Botany」系統では、いずれの版・刷も「Angiopermous」のディビジョン名に「Monopetalous」のみが利用され、「Gamopetalous」の記載がないこと、「Monocotyledon」が常に3ディビジョンに分けられていること、「Cryptogamous」が1クラスとなっている。GA79とした「Gray's Botanical Text-Book」系統では、1850年から76年までの版・刷では「Monocotyledon」がディビジョンに分けられれないこと、「Cryptogamous」が3ディビジョンに分けられていること、1879年以降は「Monocotyledon」が3ディビジョンに変更されるとともに「Cryptogamous」は2ディビジョンにまとめられている。また、「Angiopermous」のディビジョン名として「Monopetalous」に「Gamopetalous」が併記される場合がある。GA79でみられる併記は、本文中でBHを引用したことによるものだろう。「Manual」系としたGray[1876, 1877]は中間系で、「Angiopermous」をディビジョンに分けず、「Cryptogamous」も1クラスとなっている。

表 5 「原稿ノート」と「一覧」の上位分類比較 比較に用いた文献略称は表 3 を参照

「原稿」科目表	「一覧」科目表	BH	FS	GA75	GA79
Series I. Phenerogamae	Series I. Phenerogamae			Series I. Phaenogamous or Flowering Plants	Series I. Phaenogamous or Flowering Plants
Class I. Dicotyleae	Class I. Dicotyleae	Dicotyledones (Dycotiledonous)	Dicotyledones	Class I. Exogenous or Dicotyledonous Plants	Class I. Dicotyledons
Subclass I. Angiospermae	Subclass I. Angiospermae	(Angiospermous)		Subclass I. Angiopermous	Subclass I. Angioperms
Division I. Polypetalae	Division I. Polypetalae	Polypetalae (Polypetalous)	Polypetaleae	Polypetalous Division	Polypetalous Division
Division II. Monopetalarae	Division II. Monopetalarae	Gamopetalae (Gamopetalous)	Monopetalae	Monopetalous Division	Gamopetalous Division (Monopetalous)
Division III. Apetalae	Division III. Apetalae	<i>Monochlamydeae</i> (<i>Apetalpus</i>)	Monochlamudeae	Apetalous Division	Apetalous Division
Subclass II. Gymnospermae	Subclass II. Gymnospermae	<i>Gymnospermeae</i> (<i>Gymnospermous</i>)	Gymnospermae	Subclass II. Gymnospermous	Subclass II. Gymnosperms
Class II. Monocotylae	Class II. Monocotylae	<i>Monocotyledones</i>	Monocotyledon	Class II. Endogenous or Monocotyledonous Plants	Class II. Monocotyledons
	Division IV. Spadiciflorae			Spadiceous Division	Spadiceous Division
	Division V. Petaloideae			Petaloideous Division	Petaloideous Division
	Division VI. Glumiferae			Glumaceous Division	Glumaceous Division
Series II. Cryptogamae	Series II. Cryptogamae	<i>Cryptogames</i>		Series II. Cryptogamous or Flowerless Plants	Series II. Cryptogamous or Flowerless Plants
Class III. Acrogens	Class III. Acrogens	<i>Vasculaires</i>		Class III. Acrogenous Plants or Acrogens	Class III. Acrogens
					Vascular Division
					Cellular Divisin
Class IV. Thallogens					Class IV. Thallogens or Thallophytes

表 6 「一覧」上位分類の和名比較 比較に用いた文献略称は表 3 を参照

「原稿ノート」	「一覧」	OT	DT	MS	IT	GY
第一門 顕花植物	第一門 顕花植物	有花 (Phanerogamous plant)	有花 (Phanerogamous plants)	顕花植物 (Phanerogamae)	有花又ハ顕花ノ (Phaenogamousu or Phanerogamous)	有花即チ顕花
第一部 雙子葉	第一部 雙子葉	雙子葉	外長部 即 雙子葉 (-ledones)	雙子葉	双子葉 (-ledon)	外長即チ雙子葉
第一小部 包子	第一小部 包子	被子	被子	-	被子ノ (-mous)	被子
第一類 多辨花	第一類 多辨花	多辨花 (-lous)	多辨花	多辨花 (Choripetalae)	多辨ノ (-lous)	多辨
第二類 單辨花	第二類 單辨花	單辨 (-tolous, Gamopetalous)	單辨花 (Gamopetalae, Monopetalae)	單辨花 (Sympetalae)	單辨ノ (-lous)	單辨
第三類 無辨花	第三類 無辨花	-	-	無辨花	無弁ノ (-lous)	無辨
第二小部 裸子	第二小部 裸子	裸子	裸子	裸子	裸子類	裸子
第二部 單子葉	第二部 單子葉	單子葉 (-ledons)	内長部 即 單子葉 (Endogenae, or Monocotyledones)	單子葉 (Monocotyleae)	單子葉 (-ledon)	内長即チ單子葉
	第四類 栓花	-	-	栓花類	-	
	第五類 辨花	有弁花 (Floridae)	有弁花類 (Petaloidae, or Floridae)	-	-	
	第六類 粗花	禾本類	禾本類	粗花 (Glumiflorae)	-	
第二門 隱花植物	第二門 隱花植物	無花部 (-mous)	無花部 即 無子葉 (Cryptogamous, Acotyledones)	-	無花ノ、隱花ノ (-mous, or -gamic)	無花即チ隱花
第三部 上長部	第三部 上長部	無花部ノ一名	上長部 (Aetheooamae, or Cormogenae)	-	-	上長
第四部 通長部		通長部ノ一名 (-nae)	通長部 (Amphigamae, Thallogeneae, or Cellulares)	-	扁長植物 (Thallogen or Thallophyte)	通長

表 7「一覧」と『北海道志』の科名配列比較

「一覧」			『北海道志』					
顕花植物 - 雙子葉 - 包子 - 多辨花			顕花植物部 - 雙子葉 - 多辨花植物					
一覧 ID	科名	『北海道志』との対応	『北海道志』ID	科名	「一覧」との対応	BH 科番号	FS 科番号	備考
C_01	毛茛科	H_01	H_01	毛茛科	C_01	1	1	BH では H_04 に含まれる
C_02	木蘭科	H_02	H_02	木蘭科	C_02	4	3	
C_03	蓮木科	H_03	H_03	木通科	C_03	7	5	
C_04	伏牛花科	H_04	H_04	伏牛花科	C_04	7	6	
C_05	睡蓮科	H_05	H_05	睡蓮科	C_05	8	7	
C_06	罌粟科	H_06	H_06	罌粟科	C_06/C_07	10	8	
C_07	延胡索科	H_06	H_07	十字科	C_08	11	9	
C_08	十字科	H_07	H_08	堇菜科	C_09	15	11	
C_09	堇菜科	H_08	H_09	遠志科	C_11	20	14	
C_10	茅膏菜科	H_28	H_10	石竹科	C_12	22	15	
C_11	遠志科	H_09	H_11	馬齒莧科	×	23	16	
C_12	石竹科	H_10	H_12	金絲桃科	C_13	26	19	
C_13	金絲桃科	H_12	H_13	山茶科	C_14	28	20	
C_14	山茶科	H_13	H_14	菩提樹科	C_15	33	23	
C_15	菩提樹科	H_14	H_15	牻牛兒科	C_16	38	25	
C_16	牻牛兒科	H_15	H_16	芸香科	C_17	39	26	
C_17	芸香科	H_16	H_17	黄楝樹科	C_18	40	27	
C_18	苦白木科	H_17	H_18	冬青科	C_44	46	30	
C_19	漆樹科	H_22	H_19	衛矛科	C_22	47	31	
C_20	葡萄科	H_20	H_20	葡萄科	C_20	50	33	
C_21	鼠李科	×	H_21	無患樹科	C_23	51	34	
C_22	衛矛科	H_19	H_22	漆樹科	C_19	53	36	
C_23	無患樹科	H_21	H_23	木本鉤吻科	C_24	54	37	
C_24	木本鉤吻科	H_23	H_24	荳科	C_25	57	38	
C_25	荳科	H_24	H_25	薔薇科	C_26	58	39	
C_26	薔薇科	H_25	H_26	虎耳草科	C_27	59	40	
C_27	虎耳草科	H_26	H_27	景天科	C_28	60	41	
C_28	景天科	H_27	H_28	茅膏菜科	C_10	61	42	
C_29	蟻塔科	H_29	H_29	蟻塔科	C_29	64	44	
C_30	柳葉科	H_31	H_30	千屈菜科	C_31	69	46	
C_31	千屈菜科	H_30	H_31	柳葉科	C_30	70	47	
C_32	胡蘆科	H_32	H_32	胡蘆科	C_32	75	48	
C_33	繖形科	H_33	H_33	繖形科	C_33	80	51	
C_34	五加科	H_34	H_34	五加科	C_34	81	52	
C_35	山茱萸科	H_35	H_35	山茱萸科	C_35	82	54	

顕花植物 - 雙子葉 - 包子 - 単辨花			顕花植物部 - 雙子葉 - 単辨花植物					
一覧 ID	科名	『北海道志』との対応	『北海道志』ID	科名	「一覧」との対応	BH 科番号	FS 科番号	備考
C_36	忍冬科	H_36	H_36	忍冬科	C_36	83	55	BH では H_42 に含まれる
C_37	茜草科	H_37	H_37	茜草科	C_37	84	56	
C_38	敗醬科	H_38	H_38	敗醬科	C_38	85	57	
C_39	山蘿蔔科	H_39	H_39	蘿蔔科	C_39	86	58	
C_40	菊科	H_40	H_40	菊科	C_40	88	59	
C_41	山梗菜科	H_41	H_41	梗菜科	C_41	91	60	
C_42	桔梗科	H_42	H_42	桔梗科	C_42	91	61	
C_43	石南科	H_43	H_43	石南科	C_43	83	62	
C_44	冬青科	H_18	H_44	岩梅科	×	96	63	
C_45	齊墩科	H_47	H_45	豆兒科	C_48	117	64	
C_46	車前科	H_60	H_46	櫻草科	C_47	99	65	
C_47	櫻草科	H_46	H_47	齊墩果科	C_45	103	68	
C_48	狸藻科	H_45	H_48	狗骨科	C_60	104	69	
C_49	列當科	×	H_49	夾竹桃科	C_58	106	71	
C_50	玄參科	H_56	H_50	白前科	C_59	107	72	
C_51	馬鞭草科	H_58	H_51	龍膽科	C_57	109	74	
C_52	唇形科	H_59	H_52	花荵科	C_54	110	78	
C_53	紫草科	H_54	H_53	旋花科	C_55	113	79	
C_54	花荵科	H_52	H_54	紫草科	C_53	112	80	
C_55	施花科	H_53	H_55	茄科	C_56	114	81	
C_56	茄科	H_55	H_56	玄參科	C_50	115	82	
C_57	龍膽科	H_51	H_57	蠅毒草科	×	125	84	
C_58	夾竹桃科	H_49	H_58	馬鞭草科	C_51	125	86	
C_59	白前科	H_50	H_59	唇形科	C_52	126	88	
C_60	狗骨科	H_49	H_60	車前科	C_46	127	90	

顕花植物 - 雙子葉 - 包子 - 無辨花

顕花植物部 - 雙子葉 - 無辨花植物

一覧 ID	科名	『北海道志』 との対応	『北海道志』 ID	科名	「一覧」 との対応	BH 科番号	FS 科番号	備考
C_61	馬兜鈴科	H_69	H_61	商陸科	C_62	132	91	
C_62	商陸科	H_61	H_62	藜科	C_63	131	92	
C_63	藜科	H_62	H_63	莧科	C_64	130	94	
C_64	莧科	H_63	H_64	蓼科	C_65	134	95	
C_65	蓼科	H_64	H_65	瑞香科	C_67	145	97	
C_66	樟科	H_68	H_66	槲寄生科	C_70	148	98	
C_67	瑞香科	H_65	H_67	胡頹子科	C_68	147	100	
C_68	胡頹子科	H_67	H_68	樟科	C_66	143	101	
C_69	檀香科	×	H_69	馬兜鈴科	C_61	138	102	
C_70	v 寄生科	H_66	H_70	大戟科	C_71	151	103	
C_71	大戟科	H_70	H_71	岩高蘭科	×	162	105	
C_72	蕁麻科	H_72	H_72	蕁麻科	C_72	153	110	
C_73	金粟蘭科	H_73	H_73	金粟蘭科	C_73	140	112	
C_74	胡桃科	H_75	H_74	殼斗科	C_75	159	113	
C_75	殼斗科	H_74	H_75	胡桃科	C_74	156	115	
C_76	樺木科	H_76	H_76	樺木科	C_76	159	117	BH では H_74 に含まれる
C_77	楊柳科	H_77	H_77	楊柳科	C_77	160	118	

顕花植物 - 雙子葉 - 裸子

顕花植物部 - 裸子植物

一覧 ID	科名	『北海道志』 との対応	『北海道志』 ID	科名	「一覧」 との対応	BH 科番号	FS 科番号	備考
C_78	松柏科	H_78	H_78	松柏科	C_78	165	120	

顕花植物 - 単子葉 - 栓花

単子葉植物

一覧 ID	科名	『北海道志』 との対応	『北海道志』 ID	科名	「一覧」 との対応	BH 科番号	FS 科番号	備考
C_79	天南星科	H_79	H_79	天南星科	C_79	191	123	
C_80	香蒲科	H_80	H_80	香蒲科	C_80	190	124	
C_81	眼子菜科	H_81	H_81	眼子菜科	C_81	195	126	
			H_82	澤瀉科	C_82	194	127	
			H_83	蘭科	C_84	169	131	
			H_84	鳶尾科	C_86	173	132	
			H_85	薯蕷科	C_87	176	136	
C_82	澤瀉科	H_82	H_86	土茯苓科	C_88	178	137	BH では H_86 に含まれる
C_83	薺草科	×	H_87	百合科	C_89	178	139	
C_84	蘭科	H_83	H_88	燈心草科	C_90	186	145	
C_85	石蒜科	×	H_89	莎草科	C_91	199	147	
C_86	鳶尾科	H_84	H_90	禾本科	C_92	200	148	
C_87	薯蕷科	H_85						
C_88	土茯苓科	H_86						
C_89	百合科	H_87						
C_90	燈心草科	H_88						

顕花植物 - 単子葉 - 禾花

一覧 ID	科名	『北海道志』 との対応
C_91	莎草科	H_89
C_92	禾本科	H_90

隠花植物 - 上長部

陰花植物

一覧 ID	科名	『北海道志』 との対応	『北海道志』 ID	科名	「一覧」 との対応	BH 科番号	FS 科番号	備考
C_93	石松科	H_91	H_91	石松科	C_93	-	151	
C_94	木賊科	H_92	H_92	木賊科	C_94	-	152	
C_95	羊齒科	H_93	H_93	羊齒科	C_95	-	153	
			H_94	芝蔴科	×	-	-	
			H_95	海藻科	×	-	-	

高い。

細かい点をみてゆくと、「一覧」と『北海道志』は前半部分の配列が類似していないだけでなく、C_10の茅膏菜科の配置が大きく異なることやC_44の冬青科が「単弁花」に含まれていることなどの違いがみられることから依拠した文献の違いがある可能性がある。

「原稿ノート」と「一覧」の比較からみた特徴

表8は、「原稿ノート」と「一覧」の科配列を比較したものである。相違点としては(1)配列が異なっている、(2)学名の語尾の記述方法(L_04のBerberideae、C_04の伏牛花科Berberidaceaeなど、学名に*を付したものに揺らぎがある、(3)野牡丹科Melastomataceae(L_30)、紫金牛科Myrsinaceae(L_47)のように「原稿ノート」に含まれているが「一覧」には含まれていないものがある、(3)逆に「一覧」にのみ含まれる茅膏菜科Droseraceae(C_10)がある、(4)莧科Amarantaceaeほか3科(L_65、L_70、L_92)は、当初「原稿ノート」に含まれていなかったがノートの左ページに追記されている、(5)冬青科Aquifoliaceae(L_30、C_44)が「原稿ノート」では「多弁花」に含まれているのに対し、「一覧」では「単弁花」に含まれている、(6)隠花植物は「原稿ノート」が9科掲載されているが、「一覧」では3科のみ掲載されているといった事項である。

まず、(1)の全体の配列について検討してみる。「原稿ノート」の配列は、「一覧」よりも『北海道志』に類似する傾向がみられるため、FSの科配列と比較した。「無弁花」以降、特に「単子葉」ではFSとの配列との違いがあることや、利用する学名の違い(FS欄の科番号に*を付したもの)があり、完全な合致とはいえないものの傾向としては類似している。一方、「一覧」の上位配列はGA75に類似していたことから、「一覧」とGA75の科配列を比較した。遠志科Polygalaceae(L_10)のように配列の違いがみられることや、山茶科Ternstroemiaceae(L_13)のようにGA75に含まれない科があることなど、完全な合致とはいえないが、傾向はおおむね類似している。特に、(5)の冬青科Aquifoliaceae(C_44)が「単弁花」に含まれている特徴、学名に「Aquifoliaceae」が用いられている点や問題点の(3)とした茅膏菜科Droseraceae(C_10)がこの場所に置かれている点は、GA以外の分類体系のいずれにもみられないものであつて、「一覧」とGA75の関係性をうかがわせる。「原稿ノート」の冬青科Aquifoliaceae(L_18)には、当初FSで利用されている「Ilicineae」の科名を記載したのち、抹消して「Aquifoliaceae」に修正し、さらに「This order in monopetalae?」と補記して「単弁花」に移動させる必要を検討している[図18]。この点からも、「原稿ノート」が整備された後、GA75を利用して「一覧」が整備された可能性が示唆される。

札幌農学校では、1886年に変更されるまで植物学部門の教育では 그레이の『Lessons』(GA75)が講義と植物学実験に、『Manual of Botany for the Northern United States』[Gray 1877]が植物分析のガイドとして利用されており、これはペンハロー時代の教育を踏襲したものであったという[開拓使 1877-1886]。ペンハローの指導を受けた宮部が 그레이の分類体系に依拠していたことは十分に考えられる。なお、「一覧」に科名記載があるにもかかわらずGA75にないものについては、Gray[1856, 1859]に北海道産とは明記していないが、日本産の植物として言及されている。FSが日本産植物の目録であるのに対し、GA75のリストがアメリカ産植物を対象としていたためにこれらの科が含まれなかったのだろう。この点からは、「一覧」が準拠した文献をGA75のみとすることには慎重にならねばならない。

(3)の野牡丹科Melastomataceae(L_30)が「一覧」に含まれないことについては、宮部[1953]の記述が参考になる。東京大学留学時に北海道産樹木標本目録を整理した宮部は野牡丹科を含んでいたが、これは植栽されていたとみられるヒメノボタンをFSが函館に自生するものとして記載していたためであるとする。「原稿ノート」の野牡丹科の項には、「Osbeckia chinensis, L., in mountain region, Oshima(Max) ×」という記載があり、これはFSの当該分類群の記載「Yéso, circa Hakodate (Maximowicz)」と、採集地情報に若干の相違はあるが合致する。同じく紫金牛科Myrsinaceaeの項には「Ardisia japonica, Bl., Shady wood, Hakodate (Wright) ?」とあり、FSの「Yeso, prope Hakodate(Wright)」と合致する。「原稿ノート」の前者には「×」、後者には「?」の追記があり、「原稿ノート」整備後に情報の修正が行われていたことを示唆する。

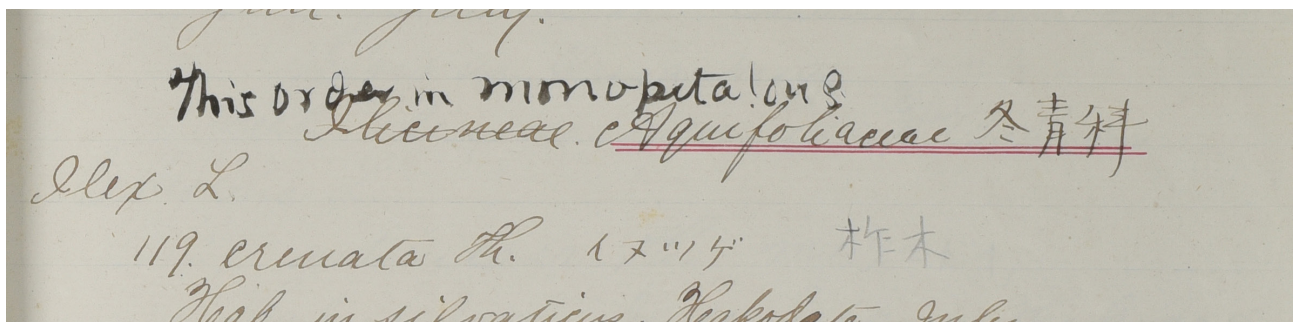


図18.「原稿ノート」冬青科の記載、「Ilicineae」を抹消し「Aquifoliaceae」に修正、単弁花への移動の見解を示す

表 8 「原稿ノート」と「一覧」の科名配列比較

「原稿」科目表					「一覧」科目表				
顕花植物 - 双子葉 - 包子 - 多辨花					顕花植物 - 双子葉 - 包子 - 多辨花				
「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS	「一覧」ID	和名	学名	「原稿」 との対応	GA75
L_01	毛茛科	Ranunculaceae	C_01	1	C_01	毛茛科	Ranunculaceae	L_01	1
L_02	木蘭科	Magnoliaceae	C_02	3	C_02	木蘭科	Magnoliaceae	L_02	2
L_03	-	Lardizabalaceae	C_03	5	C_03	蓮木科	Lardizabalaceae	L_03	-
L_04	伏牛花科	Berberideae*	C_04	6	C_04	伏牛花科	Berberidaceae*	L_04	5
L_05	睡蓮科	Nymphaeaceae	C_05	7	C_05	睡蓮科	Nymphaeaceae	L_05	6
L_06	罂粟科	Papaveraceae	C_06	8	C_06	罂粟科	Papaveraceae	L_06	8
L_07	延胡索科	Fumariaceae	C_07	8*	C_07	延胡索科	Fumariaceae	L_07	9
L_08	十字科	Cruciferae	C_08	9	C_08	十字科	Cruciferae	L_08	10
L_09	堇菜科	Violaceae	C_09	11	C_09	堇菜科	Violaceae	L_09	14
L_10	遠志科	Polygalaceae	C_11	14*	C_10	茅膏菜科	Droseraceae	×	15
L_11	石竹科	Caryophyllaceae	C_12	15*	C_11	遠志科	Polygalaceae	L_10	36
L_12	金絲桃科	Hypericaceae	C_13	19*	C_12	石竹科	Caryophyllaceae	L_11	20
L_13	山茶科	Ternstroemiaceae	C_14	20	C_13	金絲桃科	Hypericaceae	L_12	17
L_14	菩提樹科	Tiliaceae	C_15	23	C_14	山茶科	Ternstroemiaceae	L_13	-
L_15	牻牛兒科	Geraniaceae	C_16	25	C_15	菩提樹科	Tiliaceae	L_14	24
L_16	芸香科	Rutaceae	C_17	26	C_16	牻牛兒科	Geraniaceae	L_15	27
L_17	苦白木科	Simarubeae*	C_18	27*	C_17	芸香科	Rutaceae	L_16	28
L_18	冬青科	Aquifoliaceae	C_44	30*	C_18	苦白木科	Simarubaceae*	L_17	29
L_19	衛矛科	Celastraceae	C_22	31	C_19	漆樹科	Anacardiaceae	L_23	31
L_20	鼠李科	Rhamnace*	C_21	32	C_20	葡萄科	Vitaceae	L_21	32
L_21	葡萄科	Vitaceae	C_20	33*	C_21	鼠李科	Rhamnaceae	L_20	33
L_22	無患樹科	Sapindaceae	C_23	34	C_22	衛矛科	Celastraceae	L_19	34
L_23	漆樹科	Anacardiaceae	C_19	36	C_23	無患樹科	Sapindaceae	L_22	35
L_24	-	Coriariaceae	C_24	37	C_24	木本鉤吻科	Coriariaceae	L_24	-
L_25	荳科	Leguminosae	C_25	38	C_25	荳科	Leguminosae	L_25	37
L_26	薔薇科	Rosaceae	C_26	39	C_26	薔薇科	Rosaceae*	L_26	38
L_27	虎耳草科	Saxifragaceae	C_27	40	C_27	虎耳草科	Saxifragaceae	L_27	40
L_28	景天科	Crassulaceae	C_28	41	C_28	景天科	Crassulaceae	L_28	41
L_29	蟻塔科	Haloraceae (1)	C_29	44*	C_29	蟻塔科	Haloraceae (1)	L_29	43
L_30	野牡丹科	Melastomataceae	×	45	C_30	柳葉科 *	Onagraceae	L_32	44
L_31	千屈菜科	Lythraceae	C_31	46	C_31	千屈菜科	Lythraceae	L_31	47
L_32	柳葉菜科 *	Onagraceae	C_30	47	C_32	胡蘆科	Cucurbitaceae	L_33	52
L_33	胡蘆科	Cucurbitaceae	C_32	48	C_33	繖形科	Umbelliferae	L_34	54
L_34	繖形科	Umbelliferae	C_33	51	C_34	五加科	Araliaceae	L_35	55
L_35	五加科	Araliaceae	C_34	52	C_35	山茱萸科	Cornaceae	L_36	56
L_36	山茱萸科	Cornaceae	C_35	54					

顕花植物 - 双子葉 - 包子 - 単辨花					顕花植物 - 双子葉 - 包子 - 単辨花				
「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS	「一覧」ID	和名	学名	「原稿」 との対応	GA75
L_37	忍冬科	Caprifoliaceae	C_36	55	C_36	忍冬科	Caprifoliaceae	L_37	57
L_38	茜草科	Rubiaceae	C_37	56	C_37	茜草科	Rubiaceae	L_38	58
L_39	敗醬科	Valerianaceae	C_38	57	C_38	敗醬科	Valerianaceae	L_39	59
L_40	山蘿蔔科	Dipsacae	C_39	58*	C_39	山蘿蔔科	Dipsacae	L_40	60
L_41	菊科	Compositae	C_40	59	C_40	菊科	Compositae	L_41	61
L_42	山梗菜科	Lobeliaceae	C_41	60	C_41	山梗菜科	Lobeliaceae	L_42	62
L_43	桔梗科	Campanulaceae	C_42	61	C_42	桔梗科	Campanulaceae	L_43	63
L_44	檜木科 / 石南科	Ericaceae	C_43	62	C_43	石南科	Ericaceae	L_44	64
L_45	水豆兒科 *	Lentibulariaceae*	C_48	64	C_44	冬青科	Aquifoliaceae	L_18	65
L_46	櫻草科	Primulaceae	C_47	65	C_45	齊墩科	Styracaceae	L_48	68
L_47	紫金牛科	Myrsinaceae	×	66	C_46	車前科	Plantaginaceae	L_61	69
L_48	齊墩果科	Styracaceae	C_45	68	C_47	櫻草科	Primulaceae	L_46	71
L_49	阿利護科 / 狗骨科 *	Oleaceae	C_60	69	C_48	狸藻科 *	Lentibulariaceae*	L_45	72
L_50	白前科	Asclepiadaceae	C_59	72	C_49	列當科	Orobanchaceae	L_58	75
L_51	龍膽科	Gentianaceae	C_57	74	C_50	玄參科	Scrophulariaceae	L_57	76
L_52	夾竹桃科	Apocynaceae	C_58	71	C_51	馬鞭草科	Verbenaceae	L_59	78
L_53	花荵科	Polemoniaceae	C_54	78	C_52	唇形科	Labiatae	L_60	79
L_54	施花科	Convolvulaceae	C_55	79	C_53	紫草科	Borraginaceae	L_55	80
L_55	紫草科	Borraginaceae	C_53	80*	C_54	花荵科	Polemoniaceae	L_53	82
L_56	茄科	Solanaceae	C_56	81	C_55	施花科	Convolvulaceae	L_54	83
L_57	玄參科	Scrophulariaceae	C_50	82	C_56	茄科	Solanaceae	L_56	84
L_58	列當科	Orobanchaceae	C_49	83	C_57	龍膽科	Gentianaceae	L_51	85
L_59	馬鞭草科	Verbenaceae	C_51	86	C_58	夾竹桃科	Apocynaceae	L_52	87

L_60	唇形科	Labiatae	C_52	88	C_59	白前科	Asclepiadaceae	L_50	88
L_61	車前科	Plantaginaceae	C_46	90	C_60	狗骨科*	Oleaceae	L_50	89

顕花植物 - 雙子葉 - 包子 - 無辨花

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS
L_62	商陸科	Phytolaccaceae	C_62	91
L_63	藜科	Chenopodiaceae	C_63	92*
L_64	蓼科	Polygonaceae	C_65	95
L_65	莧科	Amarantaceae (左追加)	C_64	94
L_66	瑞香科	Thymelaeaceae	C_67	97
L_67	胡頹子科	Elaeagnaceae	C_68	100
L_68	槲寄生科	Loranthaceae	C_70	98
L_69	樟科	Lauraceae	C_66	101
L_70	檀香科	Santalaceae (左追加)	C_69	99
L_71	馬兜鈴科	Aristolochiaceae	C_61	102
L_72	大戟科	Euphorbiaceae	C_71	103
L_73	蕁麻科	Urticaceae	C_72	110
L_74	金粟蘭科	Chloranthaceae	C_73	112
L_75	殼斗科 / 又茱萸科	Cupuliferae	C_75	113
L_76	胡桃科	Juglandaceae	C_74	115
L_77	樺木科	Betulaceae	C_76	117
L_78	楊柳科	Salicaceae*	C_77	118

顕花植物 - 雙子葉 - 包子 - 無辨花

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	GA75
C_61	馬兜鈴科	Aristolochiaceae	L_71	90
C_62	商陸科	Phytolaccaceae	L_62	92
C_63	藜科	Chenopodiaceae	L_63	93
C_64	莧科	Amarantaceae	L_65	94
C_65	蓼科	Polygonaceae	L_64	95
C_66	樟科	Lauraceae	L_69	96
C_67	瑞香科	Thymelaeaceae	L_66	97
C_68	胡頹子科	Elaeagnaceae	L_67	98
C_69	檀香科	Santalaceae	L_70	99
C_70	槲寄生科	Loranthaceae	L_68	100
C_71	大戟科	Euphorbiaceae	L_72	102
C_72	蕁麻科	Urticaceae	L_73	103
C_73	金粟蘭科	Chloranthaceae	L_74	-
C_74	胡桃科	Juglandaceae	L_76	105
C_75	殼斗科	Cupuliferae	L_75	106
C_76	樺木科	Betulaceae	L_77	108
C_77	楊柳科	Salicaceae*	L_78	109

顕花植物 - 雙子葉 - 裸子

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS
L_79	松柏科	Coniferae	C_78	120

顕花植物 - 雙子葉 - 裸子

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	GA75
C_78	松柏科	Coniferae	L_79	111

顕花植物 - 单子葉

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS
L_80	天南星科	Araceae	C_79	123*
L_81	香蒲科	Typhaceae	C_80	124
L_82	蘭科	Orchidaceae	C_84	131
L_83	眼子菜科	Naidaceae	C_81	126*
L_84	澤瀉科	Alismaceae	C_82	127
L_85	石蒜科	Amaryllidaceae	C_85	133
L_86	鳶尾科	Iridaceae	C_86	132
L_87	土茯苓科	Smilaceae	C_88	137
L_88	百合科	Liliaceae	C_89	139
L_89	燈心草科	Juncaceae	C_90	145
L_90	薺草科	Pontederiaceae	C_83	144
L_91	莎草科	Cyperaceae	C_91	147
L_92	薯蕷科	Dioscoreaceae (左追加)	C_87	136
L_93	禾本科	Graminae	C_92	148

顕花植物 - 单子葉 - 栓花

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	GA75
C_79	天南星科	Araceae	L_80	112
C_80	香蒲科	Typhaceae	L_81	113
C_81	眼子菜科	Naidaceae	L_83	-

顕花植物 - 单子葉 - 辨花

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	GA75
C_82	澤瀉科	Alismaceae	L_84	114
C_83	薺草科	Pontederiaceae	L_90	116
C_84	蘭科	Orchidaceae	L_82	117
C_85	石蒜科	Amaryllidaceae	L_85	120
C_86	鳶尾科	Iridaceae	L_86	121
C_87	薯蕷科	Dioscoreaceae	L_92	122
C_88	土茯苓科	Smilaceae	L_87	123
C_89	百合科	Liliaceae	L_88	124
C_90	燈心草科	Juncaceae	L_89	125

顕花植物 - 单子葉 - 穎花

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	GA75
C_91	莎草科	Cyperaceae	L_91	129
C_92	禾本科	Graminae	L_93	130

隠花植物 - 上長部

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS
L_94	石松科	Lycopodiaceae	C_93	151
L_95	木賊科	Equisetaceae	C_94	152
L_96	-	Ophioglossaceae	×	-
L_97	紫蕨科	Osmundaceae	×	-
L_98	羊齒科	Filices	C_95	153
L_99	土馬騮科	Musci	×	-
L_100	蛇腹苔科	Hepaticae [後筆]	×	-

隠花植物 - 上長部

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	GA75
C_93	石松科	Lycopodiaceae	L_94	134
C_94	木賊科	Equisetaceae	L_95	131
C_95	羊齒科	Filices	L_98	132

隠花植物 - 通長部

「原稿」ID	和名	学名	「一覧」 との対応	FS
L_101	地衣科	Licheus	×	-
L_102	海藻科	Algae	×	-

この事例とは逆に、「原稿ノート」に記載がない (3) および (4) の 4 科については、FS で北海道に分布しているという情報がない。FS に基づいて「原稿ノート」が整備されたために、これらの科については記載がされなかったが、「一覧」の整備までに何らかの情報の追加、修正が行われたことが示唆される。

(6) については「一覧」完成が博覧会開催までに間に合っていなかったことや、出品標本点数が 500 点と切りの良いものになっていること、「一覧」末尾には朱書きで海藻などへの言及・追記があることから、「一覧」は宮部の調査内容すべてが盛り込まれていない可能性を指摘するにとどめ、詳細については個別記載の比較を行いながら検討することとしたい。

ここまでの検討では、「原稿ノート」は FS との関係が、「一覧」は GA75 との関係がうかがわれた。ただし、GA75 とは完全に合致しているわけではない。現時点では、宮部が「一覧」制作時に依拠した文献は現存が確認できないペーマーの目録という仮説を提示しておきたい。開拓使の業務としてペーマーが採集した植物標本の同定がグレイに依頼されたことを考慮すれば、ペーマーの目録にグレイの影響が及んでいることは十分に想定されるだろう。以降の個別の種の記載、現存標本の調査にあたっては、この仮説の検証についても実施してゆく。

本稿では、「一覧」と「原稿ノート」について、概要紹介を行うとともに科以上の分類群の記載の比較を行った。相違点の検証により、従来の見解の再検討や成立過程を解明できる可能性が示された。次稿以降において、属、種レベルの記載の比較をつけ、様々な側面から「一覧」の価値を見出してゆく。

(参考文献)

- Bentham, G., and J. D. Hooker. 1862. *Genera plantarum: ad exemplaria imprimis in Herbariis Kewensibus servata definita*. Lovell Reeve & Co., London.
- Capron, H. 1875. Reports and official letters to the Kaitakushi. Kaitakushi.
- ケブロン ホーレス・開拓使外事課 (訳) . 1879. 開拓使顧問ホラシ・ケブロン報文 . 開拓使 .
- 埴甘度爾列, 田中芳男 . 1875. 埴甘度爾列氏植物自然分科表 . 文部省博物局, 東京 .
- Eichler, A. W. 1880. *Syllabus der Vorlesungen über specielle und medicinisch-pharmaceutische Botanik*. Gebrüder Borntraeger.
- Franchet, A., and L. Savatier. 1875-1879. *Enumeratio plantarum in Japonia* Vol. 1, Vol. 2. F. Savy, Paris.
- Gray, A. 1856. List of dried plants collected in Japan, by S. Wells Williams, Esq., and Dr. James Morrow. Pages 291-294 in M. C. Perry, editor. *Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan*. A.O.P. Nicholson, Printer, Washington.
- Gray, A. 1859. Diagnostic characters of new species of phænogamous plants, collected in Japan by Charles Wright, botanist of the US North Pacific exploring expedition.(published by request of Captain John Rodgers, commander of the expedition.) With observations upon the relations of the Japanese flora to that of North America, and of other parts of the northern temperate zone. *Memoirs of the American Academy of Arts and Sciences* 6:377-452.
- Gray, A. 1868. Gray's lessons in botany and vegetable physiology, illustrated by over 360 wood engravings, from original drawings, by Isaac Sprague. To which is added a copious glossary, or dictionary of botanical terms. Ivison, Blakeman, Taylor, New York ; Chicago.
- Gray, A. 1875. *Field, Forest, and Garden Botany: A Simple Introduction to the Common Plants of the United States, East of the Mississippi, Both Wild and Cultivated*. Ivison, Blakeman, Taylor, New York ; Chicago.
- Gray, A. 1876. *FManual of the botany of the Northern United States, including the district east of the Mississippi and north of North Carolina and Tennessee, arranged according to the natural system*. 5th ed. Ivison, Blakeman, Taylor, New York ; Chicago.
- Gray, A. 1877. Gray's lessons in botany and vegetable physiology, illustrated by over 360 wood engravings, from original drawings, by Isaac Sprague, to which is added a copious glossary, or dictionary of botanical terms ; *Manual of the botany of the Northern United States, including the district east of the Mississippi and north of North Carolina and Tennessee, arranged according to the natural system*. Ivison, Blakeman, Taylor.
- Gray, A. 1879. *Gray's Botanical Text-Book*. Ivison, Blakeman, Taylor & Co., New York.
- Gray, A. 1880. *Structural botany or organography on the basis of morphology : to which is added the principres of taxonomy and phytography, and a glossary of botanical terms*. Ivison, Blakeman, Taylor & Co., New York.
- グレイ アーサ, 矢田部良吉 . 1883. 植物通解 . 文部省編輯局, 東京 .
- 北海道大学総合博物館 . 2020. 北大総合博物館のすごい標本 . 北海道新聞社, 札幌 .
- 岩川友太郎 . 1884. 生物学語彙 . 集英堂, 東京 .
- 開拓使 . 1878-1881. 札幌農學年報、覆刻札幌農學年報 (1976) . 開拓使 (北海道大学図書刊行会, 札幌) .
- 開拓使 . 1884. 北海道志 卷 34 物産 . 大蔵省, 東京 .

(25) 現存しないペーマーの目録内容を把握するためには、同定を行ったグレイから東京大学に移管されたペーマーの標本を利用することが有益であろう。現時点では実見に至っていないが、今後調査を進めてゆく。

- 加藤克. 2021. 札幌農学校所属博物館 (Hokkaido University Natural History Museum) 所蔵水産博覧会資料について. 札幌博物場研究会誌 2021:93-115.
- Lindley, J. 1862. *School Botany, or, The Rudiments of Botanical Science*. Bradbury & Evans, London.
- 松原新之助. 1879. 植物綱目撮要. 晩翠園, 東京.
- 松村任三, 矢田部良吉. 1884. 日本植物名彙. 丸善, 東京.
- Maximowicz, C. J. 1866-1870. *Diagnoses plantarum novarum Japoniae et Mandshuriae*. Bulletin de l'Académie Impériale des Sciences de St.-Petersbourg Ser.3.
- 明治文献資料刊行会. 1975a. 第二回内国勸業博覧会出品目録 (事務局) 明治十四年. 明治文献資料刊行会.
- 明治文献資料刊行会. 1975b. 第二回内国勸業博覧会場案内 (事務局) 明治十四年; 第二回内国勸業博覧会褒賞授与人名表 (事務局) 明治十四年. 明治文献資料刊行会, 東京.
- Miquel, F. A. W. 1866-1867. *Prolusio florum Japonicarum*. C. G. Van Der Post, Amsterdam.
- Miyabe, K. 1932. Concerning the Foundation of the Tokyo Botanical Society. 植物学雑誌 46:145-146.
- 宮部金吾博士記念出版刊行会. 1953. 宮部金吾. 宮部金吾博士記念出版刊行会, 東京.
- 内務省博物局. 1880. 博物館列品目録 天産部 植物類. 内務省博物局, 東京.
- 中尾眞弓. 1993. あるお雇い外国人・園芸家の足跡 L.Boehmer に関する Report No.4. 横浜植物会年報 22:44-47.
- 大蔵省. 1885. 開拓使事業報告第2編. 大蔵省, 東京.
- 小野職愨, 田中芳男. 1874. 植学訳筌. 文部省, 東京.
- Siebold, P.F. von, Zuccarini, J.G. & Miquel, F.A.W. 1835-1870. *Flora Japonica sive plantae quas in imperio Japonico collegit, descripsit, ex parte in ipsis locis pingendas curavit Dr. Ph. Fr. de Siebold*. Vol. 1. Leiden: Apud auctorem; Vol. 2. Leiden: In Horto Sieboldiano Acclimatationis dictis.
- 東京大学理学部. 1877-1880. 小石川植物園草木目録 = Catalogue of plants in Koishikawa Botanical Garden. 前編 双子葉之部, 後編 単子葉之部. 東京大学理学部, 東京.
- 東京大学理学部. 1881-1883. 小石川植物園草木図説 卷1, 卷2. 東京大学, 東京.
- Thunberg, C. P. 1784. *Flora Japonica*. J. G. Mülleriano, Leipzig.
- .